



Title	ミシェル・サッバークの人生と『千夜一夜』：彼の残したパリ写本およびサンクトペテルブルク写本の調査から
Author(s)	中道, 静香
Citation	アラブ・イスラム研究. 2021, 19, p. 147-180
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ミシェル・サッバーグの人生と『千夜一夜』

——彼の残したパリ写本およびサンクトペテルブルク写本の調査から——

中道 静香*

The Life of Michel Sabbagh and the *Thousand and One Nights*: An Investigation of his Two Manuscripts Located in Paris and St. Petersburg

This article specifically describes works by Michel Sabbagh (1785–1816), a Syrian Christian intellectual who left many Arabic manuscripts in his own handwriting in Europe. After serving as a secretary in the French army during the Napoleonic invasion of Egypt (1798–1801), he moved from Cairo to Paris. Thereafter he worked as a typographer, copyist and restorer to treat Arabic materials in the French national printing house and library. Until his death, he continued his personal work at reproducing Arabic manuscripts for the renowned orientalist while working at the national library.

One of his most famous authored manuscripts is a complete manuscript of the *Thousand and One Nights* (*Alf Layla wa-Layla*) held in the National Library of France (arabe 4678–79). It was once believed to be a copy of the manuscript composed at Baghdad in 1703, according to its colophon, but it turned out to have been fabricated by Sabbagh in Paris, as Muhsin Mahdi (1994) revealed. The new finding led to the general recognition of his manuscript as a fake that had confused the lineage of the manuscripts and printed editions of the *Nights*. Sabbagh also wrote another complete manuscript of the *Nights* in Paris, now held as ANS 355 (3 vols.) in the National Library of Russia, St. Petersburg, to which little attention has ever been paid.

This study investigates these two manuscripts authored by Sabbagh, setting aside questions of authenticity and genuineness. They are broadly similar in that the texts include tales from Galland ms. (arabe 3609–3611), Chavis mss. (arabe 3613–3614, 3616), Chavis-related ms. (arabe 3637), and Maillet ms. (arabe 3612), but they mutually differ in some tales which are included close to the end. Particularly, the St. Petersburg ms. is characterized by its inclusion of the tales of “Sindbâd the Seaman,” “Tâj al-Mulûk,” and “‘Azîz and ‘Azîza.” They also present some differences in wording, division of nights and colophon. We examine more closely why and how Sabbagh compiled such manuscripts, considering his genealogy and biography, his life and work in Paris, and his relation to the European orientalist.

1. 序

18世紀、アントワーヌ・ガラン (Antoine Galland, 1646–1715) によるフランス語

* 大阪大学 非常勤講師、国立民族学博物館 外来研究員

版『千夜一夜』(ガラン版)¹⁾がヨーロッパで人気を博すと、東洋学者の間には『千夜一夜』のアラビア語写本を求める気運が高まった。ガランが翻訳に使用した3巻の『千夜一夜』写本(ガラン写本 BnF arabe 3609–3611)は、282夜分にすぎない。それ以降の翻訳は他の様々な物語を寄せ集めて継続されたものの、題名通りの第1001夜では締めくくられなかった。どこかに存在しているであろう未知の物語への関心が増し、欠けた断片の探求が始まったのは、自然な成り行きであった。東洋との接点をもったヨーロッパ人たち——主に学者、外交官、旅行家、探検家、貿易商——は、より完全な『千夜一夜』写本の収集に情熱を傾けたのである。

そのような状況の中、後の時代に「偽写本」と呼ばれることになるいくつかの写本が生まれた。その代表は、ムフスィン・マフディの研究によって指摘された、シャヴィ写本(BnF arabe 3613–1614)とサッバーグ写本(BnF arabe 4678–4679)である²⁾。シャヴィ写本には、ガランがハンナー・ディヤーブ(Hannā Diyāb)³⁾というシリア人から教わりフランス語で書き記した物語群を、ドム・デニス・シャヴィ(Dom Denis Chavis / Dīyūnisūs Shāwīsh)⁴⁾がアラビア語に翻訳したもの——つまりガラン版からのアラビア語訳——が含まれていた。またサッバーグ写本は、ミシェル・サッバーグ(Michel Sabbagh / Mikā'il aṣ-Ṣabbāgh, 1775–1816)がシャヴィ写本のほぼ全ての内容を取り入れた写本である。つまり、アラビア語写本に依拠しない「捏造」された本文が混入していることから、これら2つの写本には偽写本という評価が下された。マフディは、自身が構築した『千夜一夜』写本の系統図の中で、最古のまとまった写本であるガラン写本を、親写本(祖型)に最も近いものと位置づける一方、シャヴィ写本とサッバーグ写本はその系統図に含めていない⁵⁾。

たしかに、東洋学者らにとって、『千夜一夜』写本の真贋は重要な問題であった。例えば、カルカット第2版(1839–42)の出版の経緯にそのことがうかがえる。1836年、英領インドのカルカット(現コルカタ)にあったベンガル・アジア協会に、エジプトから将来したという『千夜一夜』写本(マカン写本)が持ち込まれた。そこで、アラビア語校訂版の出版の是非を審議する委員会が設けられたが、委員らはまず、この写本が真正(authentic)かどうかを見極めることが求められたのである⁶⁾。

しかし、こと『千夜一夜』に関しては、写本の真正性を柔軟にとらえる必要があ

1) Gallan, Antoine, 1704–1717.

2) Mahdi, 1994: 52–72.

3) アレッポ出身のマロン派キリスト教徒で、「アラジン」や「アリババ」を含む、ガラン版のいくつかの物語の情報源となった人物(Zotenberg 1886: 28–34, Mahdi 1994: 31–33)。新資料としてディヤーブの手稿(自伝)が調査されたのを機に(Kallas 2015)、近年、彼がガランに提供した物語に関する研究が進んでいる。

4) シリア出身のギリシア正教徒修道士。コンスタンティノーブルを経て、おそらく1783年以降にパリにやってきた(Mahdi, 1994: 53)。ジャン・ジャック・カゾットとの共著『続・千夜一夜』(Chavis and Cazzote, 1788–89)を出版。

5) Mahdi, 1984, vol. 1: 30, 53. 実際、様々な写本からテキストが寄せ集められ、改変もなされているため、一般に認められているシリア系写本(15世紀頃成立、現存するのは282夜まで)とエジプト系写本(18世紀後半に成立、1001夜で完結)のいずれにも分類することはできない。

6) Mahdi, 1994: 106–116.

ろう。インド・ペルシア・アラブ各地に伝わる作者不詳の大小の物語やモチーフが融合し、アラブ地域では民衆向けの語りの演目として、もしくは書物の形で、時代とともに内容を増やし継承されてきた説話集である。さらに、近代における東洋と西洋の接触、またオリエンタリズムという思想的潮流が、この書物の内容をかなり複雑にした。『千夜一夜』という題名を共有しつつも、実際には多くのバリエーションを内在する本作品において、そもそも真偽の線引きは困難と思われる。また、仮に真正とされる写本に限って系譜を作ったところで、この説話集の発展過程を十分に説明できるとは言い難い⁷⁾。本論は、内容の出所＝典拠によって正写本と偽写本を区別し、後者を等閑に付すのではなく、むしろ曰く付きの写本も『千夜一夜』の一バリエーションとみなし、なぜそれがそのように作られる必要があったのかを探る試みである。

ここで重要なのは、何度も作り変えられ、その結果として現存する何十もの多種多様な『千夜一夜』写本から我々が知りうること、すなわち東洋人・西洋人を問わず、この説話集に引きつけられた人々が理想とする『千夜一夜』とはどのようなものだったか、という視点である。その時々最善の『千夜一夜』写本が実現される背景には、地域的なテキスト伝承以外にも、かなり個人的な事情や歴史的偶然が絡んでいたことに注意したい⁸⁾。

本論は、マフディの研究以降、偽写本扱いを受けてきたフランス国立図書館所蔵のサッバーグ写本 (BnF arabe 4678-79, 2vols.) と、これまで研究対象としてはほとんど扱われたことがないロシア国立図書館所蔵のもう一つのサッバーグ写本 (NLR ANS (arabic new series) 355, 3vols.) を考察の対象とする（便宜上、現在の所在地からそれぞれパリ写本、サンクトペテルブルク写本と呼ぶ）。そして、フランスにおけるヨーロッパ人東洋学者のサークルと、彼らの研究の下請け・補佐役であったアラブ人サッバーグとの関係、また彼自身の人物像を視野に入れつつ、彼が行った『千夜一夜』写本編纂の方針を読み解く。

2. ミシェル・サッバーグの人物像

いくつかの問題をはらんでいるにせよ、少なくとも第1001夜で完結する2種類の

7) 西洋古典学の本文批評を『千夜一夜』写本に適用した、マフディの写本系統図と祖型再構の方法論に対しては、ロバート・アーウィンが疑義を呈している (Irwin, 1994: 58)。また、青柳も『千夜一夜』を「本来的に既存の物語の「選集」」とし、「しかも引用元を明確化せず、変更を加えながら収録するスタイルをとるため、引用元（起源）を権威化することもない」、「テキストの起源という概念をそもそも不問とし無効としてしまうような間テキスト性（インター・テキストチュアリティ）の大海」だと述べている (青柳, 2009: 300)。

8) この点は、写本に限らず、翻訳やアラビア語刊本にも当てはまる。そもそもガラン版は、『千夜一夜』に由来する物語という前提を途中で放棄し、ガラン自身と出版社の意向を反映した内容に変わっていく。アラビア語刊本の一つ、カルカット第2版も「完全さ＝あらゆる内容の網羅」を追求するあまり、マカン写本の校訂にとどまらず、既存の刊本からも本文を取り入れた他、編者の不在により、途中からブーラク版をほぼ丸写ししたようなテキストを出版するに至った (Nakamichi, 2015)。

『千夜一夜』写本を残したミシェル・サッバーグとは、いかなる人物だったのだろうか。

彼の経歴については、いくつかの文献によってある程度知ることができる。欧文献では、パリの王立図書館 (Bibliothèque du Roi)⁹⁾ や東洋語学校 (École spéciale des langues orientales)¹⁰⁾ に関わりのある同時代のアラビストらが、それぞれの著書で彼について言及している他、ミショー編『人名大事典』¹¹⁾ やブロッケルマン著『アラビア語文献史』¹²⁾ などの事典類にも項目として記載されている。また、1888年にフランス国立図書館の司書ゾータンベール (Hermann Zotenberg, 1834–1909) が発表した『千夜一夜』写本に関する書誌学的論文¹³⁾ には、上述のサッバーグ写本 (BnF arabe 4678–4679) の紹介と分析がある。

アラビア語文献としては、ルイス・シェイホー (Louis Cheikho, 1859–1927)¹⁴⁾ が学術誌『マシュリク』 (*Al-Machriq*)¹⁵⁾ に、「ミーハーイール・サッバーグとその家族」 (Mikā'il aṣ-Ṣabbāgh wa-'ustatu-hu)¹⁶⁾ という小論を寄稿している。これは、1904年の夏、シェイホーがミュンヘンのヴィッテルスバッハ宮廷図書館で発見したミシェル自身の手稿 (内容は、祖父イブラーヒームを中心としたサッバーグ家の歴史) と、既刊の文献中にあるミシェルに関する記述をまとめたものである。上記の手稿は、1886年に刊行された同図書館の写本目録に記載されており¹⁷⁾、現在もその後継であるバイエルン州立図書館 (Bayerische Staatsbibliothek) に、写本番号 BSB Cod. arab. 901として所蔵されている。この写本番号のもとにまとめられているのは、紙の種類も形も不揃いで、未綴じの数十葉からなる書付である。第1葉の冒頭には「イブラーヒームの歴史」 (Tārīkh Ibrāhīm) という題名らしきものがあるが、全体として欄外への書き込みや取り消し線が多く、草稿の段階もしくは備忘録のような印象を受ける。

この文書を目にしたシェイホーは、同じ東方のキリスト教徒として、メルキト派

9) フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France) の前身。18世紀後半から19世紀前半にかけては、王政・共和政・帝政・復古王政といった国家体制の変化に従って、王立 (Bibliothèque du Roi / Bibliothèque royale)、国立 (Bibliothèque de la Nation / Bibliothèque nationale)、帝立 (Bibliothèque impériale) など、異なる呼称が用いられた。ただし本稿では、1792年の第一共和政成立時のみを区切りとし、成立前は王立図書館、以後は国立図書館と呼ぶことにする。

10) 国立東洋言語文化学院 (Institut national des langues et civilisations orientales) の前身。東洋での外交や貿易に従事する人材育成のため、1795年に設立。アラビア語 (文語および口語)、ペルシア語、トルコ語などが教授された。

11) *BU* 39, 1825: 427–428.

12) *GAL* 2nd. 2: 630, *GAL suppl.* 2: 728.

13) Zotenberg, 1888: 35–39.

14) カルデア・カトリック教徒のイエズス会士。マルディン (現在のトルコ共和国南東部の町) に生まれ、その後シリア (シャーム) 地方やヨーロッパの諸都市で活動。バイルートのサン・ジョゼフ大学を主な拠点として、東方のキリスト教文献やアラブ文学の研究に力を尽くした。『マシュリク』誌の創刊者でもある。

15) 東方キリスト教研究を趣旨とし、サン・ジョゼフ大学の神父らが発行に携わった学術誌。1898年創刊。

16) Cheikho, 1905: 24–34.

17) Aumer, 1886: 416.

カトリック¹⁸⁾教徒サッバーク家の歴史に、またそれを自らのルーツとして記録したミシェルに、感銘を受け、特別な関心を寄せたようである。彼の論文は、ミシェル・サッバークの系譜と経歴を記述したものとしては最も詳しいが、先行研究においては要約されたり、割愛されていることが多い。しかし、その記述の細部や、シェイホー自身のサッバーク（家）に対する見解には、興味深い内容が含まれている。彼の人物像を知るための重要な参考資料になると考え、引用詩を除く本文全ての翻訳を本論の末尾に付した。適宜参照されたい。

なお、同じくアラビア語で書かれたものとして、上述のシェイホーやジョルジー・ザイダーン (Jurjī Zaydān, 1861–1914) によるアラブ文学史の文献にも、略歴や著作リストを含むサッバーグの項目があるが¹⁹⁾、これらは主に『マシュリク』論文の内容を下敷きに、いくつかの新情報が追加された概説となっている。

さて、それ以降は特に注目されなかったサッバークを、再び大きく——ただし否定的に——取り上げたのがムフスィン・マフディである。マフディは、「ガランの後継者たち」の一人としてサッバークを詳しく紹介した上で、彼が筆写したとされる、いわゆる「バグダード写本」（上記のパリ写本に同じ）を彼自身の捏造の作と結論づけた²⁰⁾。これに関しては第3節の(1)で詳しく扱うことにしたい。

以上に紹介した複数の資料をもとに、改めて、サッバーク家の系譜およびミシェル自身の経歴をまとめてみよう²¹⁾。

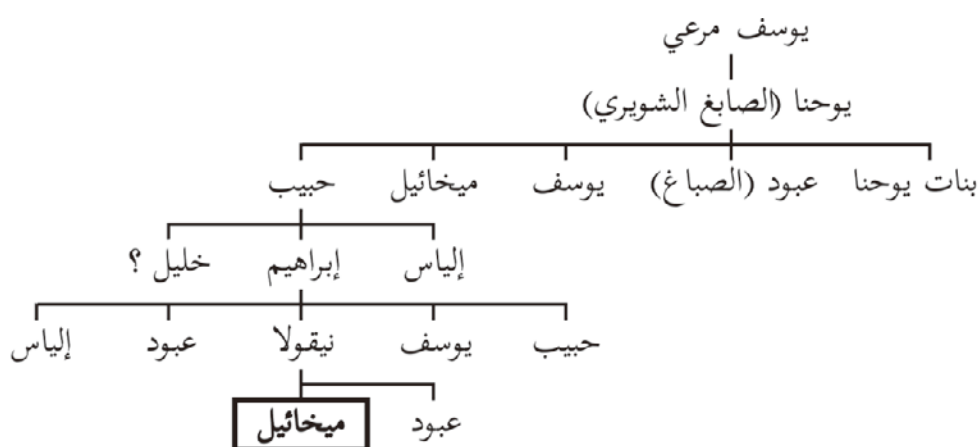


図1 サッバーク家系図1（ミシェル以前）

18) 東方典礼カトリック教会（婦一教会）の一つ。オスマン帝国下のシリア地方において、ギリシア正教会から分岐した少数宗派で、1724年カトリック教会に帰属した。ビザンティン典礼を用いる。メルキト派カトリックの成立から現代までの歴史については、菅瀬（2009: 4, 23-39）を参照のこと。

19) Cheikho, 1991: 22–23, Zaydān, 1992: 618.

20) Mahdi, 1994: 61–72.

21) 人名・地名など固有名詞のアラビア文字表記は、論文末の翻訳の中に記したので、本節では割愛する。シェイホーなどの資料をもとに作成した、図1のサッバーク家系図も参照のこと。

まず、サッバーグ家の最も古い祖先とされているのは、現在のレバノン中部の山岳地域、シュワイルという地区に住んだユースフ・マルイーという人物である。彼は、メルキト派カトリック教徒で、多くの土地を所有する裕福な人物であったらしい。その息子のユーハンナー（ヨハネ）は、その地にあった「洗礼者ヨハネ修道院」の名にちなみ、洗礼者を意味するアラビア語「サービグ」を付けて呼ばれるようになった。さらにユーハンナーの長子アブードとその兄弟らがベイルートに移ると、彼らは「サービグ」の代わりに強意形「サッバーグ」を用いるようになり、これが代々受け継がれていく家名となる。

アブードと末の弟ハビーブはアッカに移住するが、ハビーブの息子イブラーヒームは親元ではなく、叔父アブードのもとで育つ。またイブラーヒームは7歳の時、前述の洗礼者ヨハネ修道院に送られ、そこで修道士らと暮らしながら、諸学の手ほどきを受けた。特筆すべきは、彼がある修道士から医学を学び、その才能を開花させたということである。有能な医者となった彼は、当時アッカを中心にガリラヤ地方を治めていたアラブ人統治者、ザーヒル・ウマル (Zāhir al-'Umar az-Zaydānī, 1689–1775)²²⁾の難病を治療し、それを機に彼の侍医に任ぜられる²³⁾。また彼は、ザーヒルから得た報酬を元手にアッカに「聖アンデレ教会」を建てたり、経済的に困窮して彼を頼ってきた同胞らに手厚い支援を行ったりした。サッバーグ家の中ではもっとも功績の多い人物として知られる。この名士イブラーヒームの孫にあたる人物が、ミーハーイール・ブン・ニーコーラー・ブン・イブラーヒーム・サッバーグ、つまり本論の主題であるミシェル・サッバーグである。

ミシェルは、ニーコーラーの子として1775年頃²⁴⁾アッカに生まれた。幼少期はダマスカスに住み、地元の学校や教師のもとで教育を受けた。勉学を好み、文学や言語、とりわけアラビア語とその関連学問を習得したようである。1790年頃には兄アブードとともにエジプトに移り、そこでもシャイフ・ユースフ・ハラーシーを含む、複数の学者らのもとで学んだ。1792年の上エジプト訪問では、修道士がコプト語を話す現場を目にしている²⁵⁾。その後シリアに戻ったが、再びエジプトに入り、カイロ・ダミエッタ・アシュートなど各地を訪れては、シャイフやウラマーと面会した。

そんな中、後にフランスで教鞭を取り、フランス語＝口語アラビア語辞書²⁶⁾を編纂したコプト教徒、エリアス・ボクトル (Ellious Bocthor / Alyūs Buṭtur, 1784–1821) との出会いもあった。1798年に始まるフランス軍のエジプト侵攻時、ボクトルは総司令官ナポレオンの通訳の一人であった。彼はサッバーグに、フランス人の軍人や

22) 18世紀中葉に、オスマン朝下のパレスチナ（主にアッカを中心としたガリラヤ地方）を統治したアラブ人総督。

23) 後に行政職（徴税人、主席補佐官）にも就き、ザーヒル・ウマルを支えた（菅瀬, 2009: 26–27）。

24) 『人名大辞典』をはじめとする欧文献では、彼の生年を1784年とするものが多い。しかしその場合、6歳までにダマスカスで一通りの学問を修めたことになり、信憑性に欠ける。後に言及するエリアス・ボクトルの生年と混同された可能性がある。

25) Sabbagh / Thorbeche, 1886: 73. サッバーグはこの年、アシュートのムハッラク修道院 (دير المحرق) を訪れ、10日間ほど滞在している。

26) Bocthor, 1828.

学者を紹介したり、研究や書物の執筆を勧めるなど、年下ながら力になってくれた人物である。ミシェルは、ナポレオン軍の一師団を率いたレイニエ將軍 (Jean-Louis-Ébénézer Reynier, 1771–1814) に能力を高く評価され、書記として雇われることになった。しかしオスマン帝国がカイロを奪還すると、フランス軍側についたミシェルは住居や財産が没収されるという憂き目にあう。レイニエの提案もあって、ミシェルは兄アップード、友人ボクトル、その他のキリスト教徒とともに、1801年、エジプトからパリに移った。

以上が、サッバーグ家の歴史とミシェルのパリ到着までの半生である。これらを辿ってみてまず気づくのは、この一族のキリスト教（特にカトリック）に対する強い帰属意識である。発祥がレバノン山地ということもあって、修道院との密接な関わりや私財を使つての教会建設など、彼らの信心深さを示す逸話が随所に見られる。また人との交流においても、彼らはキリスト教徒コミュニティとそのネットワークに支えられてきた。サッバーグ家は、世代に関係なく、シリアとエジプト各地への移動と移住を繰り返している²⁷⁾。ミシェル自身、アッカとダマスカスを経てカイロに生活の場を移したが、そこでの人間関係もキリスト教が軸となったようで、ボクトルと親交を結び、ナポレオン軍に仕え、最終的にはフランスへ移住する決断をしたのである。

パリでは、東洋学者たちのサークルに大きく関わることになる。当時、すでに重鎮であったルイ＝マチュー・ラングレー (Louis-Mattheu Langlès, 1763–1824)²⁸⁾やシルヴェストル・ド・サシ (Silvestre de Sacy, 1758–1836)²⁹⁾に気に入られ、まずは王立印刷所の植字工として雇われた。1807年以降は、国立図書館でアラビア語写本の写字生、修復家として働く。図書館だけでなく、パリに集まるヨーロッパ人東洋学者らのためにも、数多くの写本を書き写した。その数は60以上といわれ、一部はド・サシ、コサン・ド・ペルスヴァル (Jean-Jacques-Antoine Caussin de Perceval, 1759–1835)³⁰⁾、コーゼガルテン (Johann Gottfried Ludwig Kosegarten, 1792–1860)³¹⁾、ボドゥフ (Baudeuf)³²⁾他の蔵書となった³³⁾。

ド・サシは、シリアやエジプトの現地情報を知りたい時やアラビア語に関して不明な点が生じる度に、サッバーグに質問しており、ド・サシの著書には彼に対する謝辞が散見される。彼の弟子たちも同じように、事あるごとにサッバーグに助言を

27) この移住を厭わないという特徴は、メルキ特派教徒全体に共通する (菅瀬, 2009: 26–27, 41)。

28) 東洋語学校の創立者・初代校長で、ペルシア語教授。ナポレオン帝政期以降は、国立図書館の東洋語写本の管理にも携わった。

29) 東洋語学校のアラビア語教授、後に第2代校長に就任。フランスにおける東洋学の権威であり、多くの弟子がいた。

30) コレージュ・ド・フランスのアラビア語教授。1787–92年の間は、王立図書館の写本管理者でもあった。

31) ドイツ人東洋学者。1812–15年にパリで東洋語を学ぶ。後にイエーナ大学、グライフスヴァルト大学の教授となる。

32) 19世紀初頭にエジプトにも赴いた、フランス人貿易商の一人らしいが、詳細は不明。

33) Humbert, 1819: 291–293.

求めていた。彼の当時の年齢は、20代後半から30代であったが、「豊かな知識」の持ち主であるだけでなく、「心が広く、気前がよく、優しく、誠実で、労を惜しまない」人柄³⁴⁾だったようで、多くの東洋学者たちから頼りにされていたことがわかる。

しかし、金銭的には決して豊かな生活ではなかったらしい。彼は1807年の9月に国立図書館に雇われたが、1年間の俸給は2000フランであった。フランス人の教授職の俸給が6000フランだったことを考えると、かなり少ない額である。彼のフランス語能力が乏しかったことがその理由の一つらしいが、個人的に依頼される写本の筆写が彼の重要な副収入になったことは想像に難くない。政治的混乱と財政難が生じた1814年には、サッバークを含む外国人たちへの給与の支払いが滞っていたため、ラングレーが彼らの生活費を確保するよう大臣に求めたという話もある。ド・サシに認められていた彼は、ドム・ラファエル (Dom Raphaël de Monachis / Rā[u]fā'il 'Anṭūn Zakhkhūra, 1759–1831)³⁵⁾の後任として、東洋語学校の口語アラビア語の教授職につく可能性もあったが、1816年の急死により実現することはなかった³⁶⁾。当時の年齢は41歳、自らの葬儀費用さえ残せないほど、貧窮していたという。なお、この職は彼の友人ボクトルが引き継ぐことになったものの、彼も1821年に早逝し、準備していたフランス語＝口語アラビア語辞書の出版は、1828年、子コサン・ド・ペルスヴァルの助力によって実現した。

マフディに言わせれば、これでもサッバークはまだ恵まれていた。彼はシリアの名家の出身で、名だたる東洋学者との交流があり、いくつかの著作も残っている。一方、同じく偽写本の作り手とみなされたドム・デニス・シャヴィは、王立図書館でアラビア語を教えながらも、学問的な知識が十分とはいえず、周りの信望を得ることはできなかった³⁷⁾。ただ、サッバークの能力についても、フランス人の評価とアラブ人の評価の間に若干の食い違いがあることを指摘しておかなければならない。彼の学識の高さは、多くのヨーロッパ人学者が再三語っているところだが、上述のように、彼のフランス語はフランス人の目からすると不十分なレベルだったようである。一方、ルイス・シェイホーによれば、彼のアラビア語の詩作の技術は（散文に比べると）さほど高くなかった³⁸⁾。彼の詩はいくつかのヨーロッパ言語に翻訳されているが、ヨーロッパ人らは、サッバークの書いたアラビア語詩の巧拙までは

34) Kosegarten, 1815: 28–29.

35) シリアにルーツをもち、エジプトのカイロで生まれた、メルキト派修道士。ローマの神学校で学び、ヨーロッパ言語の知識があったため、フランスのエジプト侵攻時には、ナポレオンの通訳を務めた。フランス軍撤退後はパリに移り、1803年、ナポレオンの命により、東洋語学校に新設されたアラビア語の補佐教授職を得る（1年間の俸給は5000フラン）。ドム・ラファエルが口語アラビア語を、正教授のシルヴェストル・ド・サシは正則アラビア語を担当した。しかし、ナポレオン失脚とブルボン王朝復活後の1816年、ドム・ラファエルはエジプトに戻り、通訳としてムハンマド・アリーに仕えた。1831年にカイロで死去。なお、フランスで教鞭をとっていた時代には、シャンポリオンにアラビア語やコプト語を教えている (Pouillon, 2008: 307–308)。

36) Messaoudi, 2015: 61–62.

37) Mahdi, 1994: 54, 61–62. マフディはシャヴィのことを「どこからともなくやってきて、跡形もなく消えた」と表現している。

38) Cheikh, 1905: 33.

判断できず、内容を好意的に受け入れたのだろう。

また、彼にはいくつかの著作があるが、扱われているテーマは「伝書鳩」「フランス為政者への讃歌」「シリアやエジプトの歴史」「シリアやエジプトの言語」などで、あまり一貫性がなく、雑多な印象は否めない³⁹⁾。彼がアカデミズムの表舞台に立つことなく、最後まで下請けの仕事に甘んじていたのは⁴⁰⁾、こういった諸事情によるのかもしれない。15年ほどの間に、60余りのアラビア語写本を完成させたという事実は、生活費の足しにという目的があったとはいえ、彼の学者というよりは、職人的な資質を物語っているのではないだろうか。

次節では、彼が筆写・作成した写本の内容について見ていこう。

3. ミシェル・サッバーグの残した2つの『千夜一夜』写本

(1) パリ写本：フランス国立図書館所蔵 BnF arabe 4678–4679, 2vols.

ゾータンベールがフランス国立図書館の旧蔵書番号 Supplément arabe 2522, 2523 として紹介している写本である⁴¹⁾。フォリオ（二つ折）判の2巻本で、コサン・ド・ペルスヴァル父子が所有していた。元々、父ジャン＝ジャック＝アントワヌのためにサッバーグが筆写し、おそらく1807年頃から1810年頃まで⁴²⁾には彼の手に届いていたと思われる。また、ライプツィヒ大学のフライシャー (Heinrich Leberecht Fleischer, 1801–1888) が、1827年に子アルマン＝ピエール (Armand-Pierre Caussin de Perceval, 1795–1871) からこの写本を借りたこともわかっている⁴³⁾。フライシャーが、マクシミリアン・ハビヒト (Christian Maximillian Habicht, 1775–1839) 校訂の『千夜一夜』、いわゆるブレスラウ版の第1巻⁴⁴⁾に関する評論を『アジア雑誌』(1827年)に発表する際、これを校合資料として用いたのである。

その後、父コサン・ド・ペルスヴァルが亡くなると、この写本は売りに出された。1836年に発行された彼の蔵書の売立目録に「853. 同書 [筆者補足：『千夜一夜』]、

39) 彼の著作の中で、生前に出版できたものは少なく、しかも彼のアラビア語テキストとヨーロッパ人学者による翻訳を合わせた共作の形であった。エジプトとシリアの口語に関する論考などは、シェイホーが出版に値すると評価しているものだが、出版されたのはサッバーグの死後約70年を経た1886年である。

40) 彼の名前は、東洋学者たちの著作の謝辞や注に記載されていることが多い。

41) Zotenberg, 1888: 35–39.

42) 1806年の時点で、父コサン・ド・ペルスヴァルはこの写本のことを知らない (Zotenberg, 1888)。一方、サッバーグは1807年に国立図書館の写本課の写字生・修復家として雇われ、『千夜一夜』写本を自由に閲覧できるようになった。コサン・ド・ペルスヴァルは、1787年からフランス革命時まで、王立図書館の写本管理を務めており、同図書館の『千夜一夜』写本についてもよく知っていたという (Mahdi, 1994: 66)。その彼が、おそらく1807年以降、サッバーグに『千夜一夜』写本の複写を依頼し、できあがった写本を受け取ったものと考えられる。サッバーグの没年である1816年が下限となるが、このパリ写本の作成時期を1801–10年の間とする説もあり (Marzolph and Leeuwen, 2004, vol. 2: 636)、これらを総合すると1807年から1810年の間に作られたとするのが妥当だろう。

43) Fleischer, 1827: 221.

44) Habicht, vol. 1., 1824.

フォリオ判の2巻本、ミシェル・サッバーグによる写本、良筆」として掲載されている⁴⁵⁾。この蔵書の競売から50年余りの期間、同写本の所在は不明であるが⁴⁶⁾、1888年より少し前に、ゾータンベールが書籍商からこの写本をすすめられ、国立図書館のために購入した⁴⁷⁾。以降、同図書館の蔵書として現在に至る。

マフディが、「真正性」の観点からこの写本を問題視した理由は2つある。一つは第2巻の巻末に付された奥書の内容である。概略「ヒジュラ歴1115年第2ジュマダー月（6月）10日、バグダードにおいて、シャーフイイー派・マウスィル生まれ・バグダード住民のムハンマド・タラーディー（Muḥammad aṭ-Ṭarādī）がこの写本を書き終えた」と記されていることから、この写本は、1703年10月にムハンマド・タラーディーなるムスリムによって、バグダードで作られた完全写本だと信じられた。しかしマフディは、この「バグダード写本」の奥書は全くのでっち上げで、本当のところは、サッバーグがパリ国立図書館所蔵の様々な『千夜一夜』写本を参照し、そこから引用した物語を1001夜分に切り分け、完成させた写本であることを明らかにした。しかも、パリ在住の東洋学者らがそのことに気付かないよう、引用元の写本の言葉使いなどを変えて、従来のものとは違う写本の忠実な写し、という体裁をとった。ガラン版出版の1年前という年代も、——当時の東洋学者らが写本入手のためによく赴いたアレppoやコンスタンティノープルやカイロではなく——バグダードで作られたという設定も、知識をもった東洋学者たちに疑義を抱かせないための巧妙な仕掛けだ、というのがマフディの見立てである⁴⁸⁾。

もう一つの問題は、サッバーグ自身は与り知らぬことだが、彼がシャヴィイ写本を用いたことで、ガラン版からの再訳となるアラビア語テキストを含めてしまった点である。「アラジン」を筆頭に、アラビア語原典のない、元々『千夜一夜』かどうかもわからない物語が混入したことになる⁴⁹⁾。以上の理由から、マフディはこのサッバーグ写本を偽写本と位置付け⁵⁰⁾、以降その評価が定着した。

(2) サンクトペテルブルク写本：ロシア国立図書館所蔵 NLR ANS 355, 3vols.

大きさは28×20cm、J KOOL のロゴとユリの透かしが入った紙⁵¹⁾を用いた3巻本の写本で、筆跡からサッバーグが書いた⁵²⁾ことは明らかである。この写本は、レニングラードの M. Ye. サルトィコフ＝シチェドリノ記念公共図書館（ソ連時代の旧称）

45) [Caussin de Perceval], 1836: 72.

46) 1871年の子コサンの売立目録 ([Caussin de Perceval], 1871) にこの写本の記載がないことは、ゾータンベールとマフディがすでに言及していたが (Zotenberg, 1888: 35, Mahdi, 1994: 67)、父コサンの死後に競売にかけられていたことがわかった。

47) Mahdi, 1994: 67.

48) Mahdi, 1994: 69–70.

49) ゾータンベールはサッバーグ写本の奥書を信用し、その中の「アラジン」を、ガラン版やシャヴィイ写本に先立つアラビア語原典として校訂した (Zotenberg, 1888: 69–70, ١-٨٦).

50) Mahdi, 1994: 64–65, 67–71.

51) オランダの製紙会社 J. KOOL & Comp. のもの。

52) アケルもサッバーグの直筆としている (Akel, 2016: 100–101)。

の写本課がまとめた「アラビア語写本新シリーズコレクション」の目録に掲載されている。この新シリーズコレクションには、1852年以降に保管された個人の蔵書、例えばライプツィヒ大学の聖書文献学者ティシェンドルフ (K. Tischendorf, 1815–1874) やトルキスタン初代総督カウフマン (K. P. von Kaufmann, 1818–1882) らのコレクションが含まれており、その数は800点以上にのぼる。具体的には、歴史学、地理学、天文学、医学、哲学、文法学、神学など様々な分野のアラビア語文献の写本、またアラビア語で書かれた文書や書簡で、収集地は中東、北アフリカ、中央アジアなど広い地域にわたる⁵³⁾。

サッバーグの写本は、写本番号335、題名“1001 ночь” (1001 nights)、年代は19世紀初頭、葉数303+302+312 と記載されている。また前の所有者であるギンツブルク (Gintsburg / Günzburg) のコレクションから、1936年に受入れがあったことがわかる。ユダヤ系ロシア人のギンツブルク家は、代々銀行家、慈善事業家、そしてロシアのユダヤ人コミュニティの社会的・文化的指導者を輩出した一族として名高い。中でも、19世紀から20世紀前半にかけての、ヨシフ (Osip Gavrilovich Gintsburg / Joseph Günzburg, 1812–1878)、ゴラツィー (Goratsiy / Horace, 1833–1909)、ダヴィト (David, 1857–1910) の3代は、パリとサンクトペテルブルクの両都市を拠点に、事業を成功させ社会的な地位を固めた。また彼らは学問や文化にも高い関心を寄せた。ヨーロッパでも有数の私設図書館をパリにもち、膨大かつ貴重なコレクションを築いた他、ロシアにおけるユダヤ文化の振興や学術機関の設立と運営に携わっている。特にダヴィトは、サンクトペテルブルク・グライフスヴァルト・パリで学んだユダヤ学、東洋学の研究者であり、ヘブライ語写本やアラビア語詩に関する著書もある⁵⁴⁾。サッバーグ写本はおそらくこの3代のいずれかの時期に、ギンツブルク図書館の蔵書となったと思われる。ただし、その具体的な年代や経緯についてはほとんどわからない。

アンペールは1819年の著書において、サッバーグの筆写した『千夜一夜』写本は2点あり、一つはかなり前からコサン・ド・ペルスヴァルが所有していたこと、もう一つは現在ボドゥフが持っており、そのボドゥフの写本を彼自身が参照したことを明言している⁵⁵⁾。前者がパリ写本、後者がサンクトペテルブルク写本と同定され⁵⁶⁾、作成順もこの通りではないかと推測される⁵⁷⁾。ただ、アンペールは彼が使用した写本のことを「故ミシェル・サッバーグ氏によってエジプトからもたらされた優れた写本」と述べている。実際にはパリ写本と同様、サッバーグがパリで作成した写本

53) PHE, 2014.

54) JE, vol. 6.: 109–13.

55) Humbert, 1819: 157.

56) アンペールの著書には、サッバーグの『千夜一夜』写本から引用したという、詩のテキストが夜番号付きで掲載されているのだが、これがサンクトペテルブルク写本と完全に一致する (Humbert, 1819: 40, 128–30)。

57) 前述のように、パリ写本はおそらく1807年から1810年の間に作成されたと考えられる。サンクトペテルブルク写本は、後で見るように、ラングレーの「シンドバード」テキスト (初出は1813年) と同類のものを含んでいるため、その前後の期間に作られたのではないかと推測される。

なのであるが、「エジプト伝来の写本からの写し」とアンベールに紹介していたのかもしれない⁵⁸⁾。

最初の所有者ボドゥッフの手元にあった1819年からサンクトペテルブルクの図書館に収蔵される1936年まで、100年以上の空白期間があり、確たることは言えないが、この3巻本の写本はパリでボドゥッフから直接、あるいは間接的にギンツブルク家が入手した後、いずれかの時期にサンクトペテルブルクに渡ったと思われる⁵⁹⁾。

(3) 両写本の挿話の比較

では次に、この2つの写本の内容について見ていく。両写本が取り入れた挿話を下の一覧表にまとめたので、参照されたい。表の右2列には、パリ写本 (arabe 4678-79) とサンクトペテルブルク写本 (ANS 355/1-3) について、各挿話が収録されている巻(ローマ数字)と夜番号(Nで始まる数字)を記している。左の2列(番号と挿話の題名)には、他の写本・刊本・翻訳と対照する利便のため、マルゾルフとレーウェン監修による『アラビアンナイト百科事典』の付録「引用テキスト一覧 (Concordance of Quoted Texts)」の番号と題名⁶⁰⁾を使用した。左から3例目にはガラン版での収録巻(冒頭の数字)と題名を記し、4例目にはサッバーグがパリ写本作成時に利用したと考えられるフランス国立図書館所蔵の諸写本⁶¹⁾を略号で示した〔ガラン写本 (G: arabe 3609-3611)、シャヴィーに関連する写本 (C¹: arabe 3613-3614, C²: arabe 3616, C³: arabe 3637)⁶²⁾、マイエ写本 (M: arabe 3612)⁶³⁾〕。

58) サッバーグ自身がエジプトから『千夜一夜』写本を持ち込んだ、ということはない。バグダード写本と同様、写本の出所を偽ったか、あるいは彼がこの写本作成の際に依拠した「マイエ写本」を指していた可能性もある。マイエ写本については、後の注を参照のこと。

59) ちなみにギンツブルク図書館のヘブライ語写本コレクション830点は、司書を務めていたロシア人ヘブライ学者のザークス (Senior Sachs, 1816-1892) が目録を作成した後、パリからサンクトペテルブルクへ移設された。1920年頃以降、上記を含む1913点のヘブライ語写本がモスクワのロシア国立図書館 (Russian State Library) に所蔵されている。残念ながら、アラビア語写本に関する情報は十分に得られなかった。

60) Marzolph and Leeuwen, 2004, vol. 2.: 743-782. ただし、この一覧表にない挿話については、マフディ (Mahdi, 1994, vol. 3) による英題もしくはゾータンベールによる仏題の英訳を使用し、区別のため右肩にアステリスクを付した。

61) ショーヴァンおよびマフディの研究にもとづく (Chauvin, 1900: 197-200; Mahdi, 1994, vol. 3: 54-56, 70-71)。

62) C¹ が一般にシャヴィー写本と呼ばれる2巻本で、シャヴィーの直筆、231夜分を含む。C² も1787年にシャヴィーが筆写した、282-631夜を含む写本である。C³ はシャヴィーがパリに持参した私物の写本で、別人が書いたもの。『千夜一夜』とは明記されていないがシリア系写本の内容を含む。彼とカゾットによる『続・千夜一夜』(Chavis and Cazzote, 1788-89) の出版に用いられた (Mahdi, 1994: 54-60)。

63) エジプト総領事を務めた(在任期間は1692-1708年)フランス人ブノワ・ド・マイエ (Benoît de Maillet, 1656-1738) が、エジプトから持ち帰った写本。17世紀の初期エジプト系写本に分類される。シリア系写本とは異なる物語を含み、また不完全ながらも第1001夜での完結を志向していることがうかがえる。

表1 挿話一覧表: BnF arabe 4678–4679 (Paris), NLR, ANS 355/1–3 (St. Petersburg)

No.	Titles of Tales	Titles by Galland	BnF mss.	arabe 4678–79	ANS 355/1–3
1	Shahriyâr and His Brother	1/	G, C ¹	I: introd.	I: introd.
2	The Bull and the Ass	1/ L'Âne, le Bœuf et le Laboureur	G, C ¹	I: introd.	I: introd.
3	The Merchant and His Wife		G, C ¹	I: introd.	I: introd.
4	The Trader and the Jinnî	1/ Le Marchand et le Génie	G, C ¹	I: N1–4	I: N1–4
5	The First Shaykh's Story	1/ Histoire (H.) du premier Vieillard-Baron et de la Biche	G, C ¹	I: N4–5	I: N5–6
6	The Second Shaykh's Story	1/ H. du second Vieillard et des deux Chiens noirs	G, C ¹	I: N6–7	I: N7
7	The Third Shaykh's Story		M	I: N8	I: N8
8	The Fisherman and the Jinnî	1/ H. du Pêcheur	G, C ¹	I: N8–11	I: N8–11
9	King Yûnân and the Sage Dûbân	1/ H. du Roi grec et du Médecin Douban	G, C ¹	I: N11–13	I: N11–13
11	The Husband and the Parrot	1/ H. du Mari et du Perroquet	G, C ¹	I: N14–15	I: N14–15
12	The Prince and the Ogress	1/ H. du Visir puni	G, C ¹	I: N15–22	I: N15–22
13	The Ensorcelled Prince	1/ H. du jeune Roi des Iles Noires	G, C ¹	I: N22–27	I: N22–27
14	The Porter and the Three Ladies of Baghdad	1/ H. des trois Calenders, fils de Rois, et de cinq Dames de Bagdad	G, C ¹	I: N28–37	I: N28–38
15	The First Qalendar's Tale	2/ H. du premier Calender, fils de Roi	G, C ¹	I: N37–39	I: N38–41
16	The Second Qalendar's Tale	2/ H. du second Calender, fils de Roi	G, C ¹	I: N40–46	I: N41–47
17	The Envier and the Envied	2/ H. de l'Envieux et de l'Envié	G, C ¹	I: N46–52	I: N47–55
18	The Third Qalendar's Tale	2/ H. du troisième Calender, fils de Roi	G, C ¹	I: N53–62	I: N55–68
19	The Eldest Lady's Tale	2/ H. de Zobéide	G, C ¹	I: N63–66	I: N69–72
20	The Tale of the Portress	2/ H. d'Amine	G, C ¹	I: N67–69	I: N73–77
	Harun al-Rashid and the Daughter of Kisra*		C ¹	I: N70–77	I: N78–95
21	The Three Apples	3/ Les trois Pommes	G, C ¹	I: N78–79	I: N96–100
22	Nûr al-Dîn 'Alî and His Son Badr al-Dîn Hasan	3–4/ H. de Noureddin Ali, et de Bedreddin Hassan	G, C ¹	I: N79–109	I: N101–136
23	The Hunchback's Tale	4/ H. du petit Bossu	G, C ¹	I: N110–115	I: N137–142
24	The Nazarene Broker's Story	4/ H. que raconta le Marchand chrétien	G, C ¹	I: N115–127	I: N142–154
25	The Reeve's Tale	4/ H. racontée par le Pourvoyeur du Sultan de Casgar	G, C ¹	I: N127–136	I: N154–163
26	The Tale of the Jewish Doctor	4/ H. racontée par le Médecin juif	G, C ¹	I: N137–145	I: N164–171

27	Tale of the Tailor	4–5/ H. que raconta le Tailleur	G, C ¹	I: N145–158	I: N172–185
28	The Barber's Tale of Himself	5/ H. du Barbier	G, C ¹	I: N158–159	I: N185–187
29	The Barber's Tale of His First Brother	5/ H. du premier Frère du Barbier	G, C ¹	I: N160–163	I: N187–191?
30	The Barber's Tale of His Second Brother	5/ H. du second Frère du Barbier	G, C ¹	I: N163–166	I: N191?–193
31	The Barber's Tale of His Third Brother	5/ H. du troisième Frère du Barbier	G, C ¹	I: N166–167	I: N194–196
32	The Barber's Tale of His Fourth Brother	5/ H. du quatrième Frère du Barbier	G, C ¹	I: N167–169	I: N196–197
33	The Barber's Tale of His Fifth Brother	5/ H. du cinquième Frère du Barbier	G, C ¹	I: N169–173	I: N198–204
34	The Barber's Tale of His Sixth Brother	5/ H. du sixième Frère du Barbier	G, C ¹	I: N173–177	I: N204–209
60	'Alī ibn Bakkār and Shams al-Nahār	5/ H. d'Aboulhasan Ali Ebn Becar, et de Schemselnihar, favorite du Calife Haroun Al-raschild	G, C ¹	I: N178–207	I: N210–249
35	Nūr al-Dīn 'Alī and Anīs al-Jalīs	7/ H. de Noureddin et de la belle Persienne	G, C ¹	I: N208–236	II: N250–284
227	Jullanār	7/ H. de Beder, Prince de Perse, et de Giauhare, Princesse du Royaume du Samandal	G, (C ¹)	I: N237–278	II: N285–332
61	Qamar al-Zamān and Budūr	6/ H. des Amours de Camaralzaman, Prince de l'Isle des Enfants de Khaledan, et de Badoure, Princesse de la Chine	G, C ¹ : –N288 C ² , M: N289–	I: N279–336	II: N333–421
263	The Sleeper Awakened*	9/ H. du Dormeur éveillé	C ²	I: N337–386	II: N422–481
	The Persian Physian and the Young Cook*		C ² , C ³	I: N387 –II: N408	II: N482–508
	The Unfortunate Youth in the Madhouse*		C ² , C ³	II: N408–435	II: N509–544
36	Ghānim ibn Ayyūb [+ 1 tale]	8/ H. de Ganem, fils d'Abou Aïbou, surhomme l'Esclave d'Amour	C ²	II: N436–496 [N449]	II: N509 –III: N609
345	Zayn al-Asnām	8/ H. du Prince Zeyn Alasnam, et du Roi des Génies	C ²	II: N497–513	III: N610–626
346	'Alā' al-Dīn	9–10/ H. d'Aladdin, ou la Lampe merveilleuse	C ²	II: N514–591	III: N627–686
(181)	Bakhtzad and the Ten Viziers* [+ 9 tales]		C ² , C ³	II: N592–680 [N621, N629, N632, N640, N645, N649, N654, N660, N678]	III: N687–746
179	Sindbād the Seaman	3/ H. de Sindbad le Marin			III: N747–788

40	Tāj al-Mulūk and the Princess Dunyā				III: N789–851
41	‘Azīz and ‘Azīza				III: N793–822
39	‘Umar ibn al-Nu‘mān and His Sons Sharrkān and Daw’ al-Makān		M, etc.	II: N681–1001 [N864, N870, N887, N918]	III: N852–1001
42	The Hashish Eater		M, etc.	II: N864	
230	Hasan of Basra		M, etc.	II: N870	
73	The Mock Caliph		M, etc.	II: N887	
	Two brothers ‘Āmir and Ghādir and thier children Jamīla and Buthayna*		M, etc.	II: N918	

両写本の大部分は似通った内容である。枠物語の始まりから「ジュッラナール (Jullanār)」までは、ガラン写本3巻 (G) とシャヴィイ写本 (C¹) (シャヴィイがガラン写本を元にほぼ同じ挿話を含めた写本) が、使われている。ただし、番号7の「第3の長老の話 (The Third Shaykh’s Story)」は、ガラン写本にもシャヴィイ写本にもなく、サッバーグが独自にマイエ写本 (M) から取り入れた。また「キスラーの娘の話 (Harun al-Rashid and the Daughter of Kisra)」(ANS 355/1, I: N78–95) もガラン写本にはないが、シャヴィイが独自に C¹写本に含めたものを、サッバーグが踏襲している。ガラン写本第3巻は「カマルッザマーン (Qamar al-Zamān and Budūr)」の途中で中断する。したがってここからのサッバーグ写本は、別の1巻本のシャヴィイ写本 (C²) とシャヴィイ所有の写本 (C³) に拠り、「カマルッザマーン」から「バフトザードと10人の大臣 (Bakhtzad and the Ten Viziers)」までを収録する。この中には、そもそも『千夜一夜』の挿話ではないものや、典拠となるアラビア語写本が存在しないものが含まれ、色々なソースからの集成といえる。ガラン版のフランス語からアラビア語に訳し直された「アラジン (‘Alā’ al-Dīn)」もここに入る⁶⁴⁾。

この後が、2つのサッバーグ写本の大きく異なるところで、パリ写本は「10人の大臣」が終わると、マイエ写本に基づく、エジプト系写本の代表的挿話「オマル・ブン・ヌウマーン (‘Umar ibn al-Nu‘mān)」が始まり、これが第1001夜まで続く。一方サンクトペテルブルク写本は、「シンドバード (Sindbād the Seaman)」 「タージルムルーク (Tāj al-Mulūk)」 「アジーズとアジーザ (‘Azīz and ‘Azīza)」 というパリ写本にはない3話が入り、その後にやや短い「オマル・ブン・ヌウマーン」が続いて第1001夜で終わる。ガラン版の第3巻に含まれる「シンドバード」が取り入れられている点が、サンクトペテルブルク写本の大きな特徴である。

なお両写本は、同じ挿話であっても割り当てる夜の数が少しずつ異なっている。全体として、サンクトペテルブルク写本のほうが一話に対する夜の数が多し。早く

64) この段階で、杉田 (2012: 5–7) が定義した、ヨーロッパ語訳に含まれる物語の来歴による分類、すなわち『千夜一夜』のアラビア語原典に基づく「正典」、『千夜一夜』以外の典拠に由来するが、アラビア語原典も存在する「外典」、アラビア語原典が見つからない〈親のない物語〉(Orphan Stories) の3種類すべてを含むことになる。

第1001夜に到達するための方策なのか、この傾向は夜話が先に進んでいくほど顕著になり、結果として両者本の各挿話に対する夜番号のずれも大きくなる。

マフディが指摘した通り、サッバーグはパリ写本を作成する際、既存の写本をそのまま書き写して完全な複写を行うのではなく、夜の区分や固有名詞を含む単語や言い回しを変えるなどして、これまでにない新たな写本に仕立てた。同じことは、もう一つのサッバーグ写本、サンクトペテルブルク写本にもいえる。最初の2巻分の挿話の編成は、パリ写本とほぼ同じであるが、第3巻ではパリ写本には見られない、いくつかの物語を含んでいる。既存の写本ともパリ写本とも異なる構成の、新しい『千夜一夜』写本を編纂しようとした意図が見える。その際、ガランが（『千夜一夜』写本とは別の）単独の写本から翻訳し、ガラン版に収めた「シンドバード」の物語が追加されたのは、象徴的といえよう。

またパリ写本は、本文以外に色々な仕掛けが施された写本で、前述のように、バグダードの写本作成者が著したと見せかける奥書や注釈がある他、挿話の区切りの部分には「qif (止まれ)」という欄外への書き込みが加えられている。一方、サンクトペテルブルク写本は、インクは黒と赤の2色を使っているものの、内容はほとんど本文のみという、シンプルな造りである。写本作成に関わる「偽りの」メタデータも存在せず、粉飾写本を作るつもりではなかったようだ。

では、サンクトペテルブルク写本の「シンドバード」はどの写本から取り入れられたのだろうか。ラングレーは1814年に出版した『海のシンドバードの旅行記』⁶⁵⁾の序文に、コサン・ド・ペルスヴァルが所有する、サッバーグの手で書かれた写本を使わせてもらったと述べている。この「シンドバード」のテキストは、初出がサヴァリ著『口語・文語アラビア語文法』⁶⁶⁾の付録の読み物としてであり、その一年後にラングレーが単独の書籍として出版した⁶⁷⁾。サッバーグは、既存の写本をそのまま書き写すわけではなく、何かしら変更を加えている場合が多いため、本文の異同のみでは判断できないが、語の追加・削除や語順の変更など細かな違いを差し引いても、全体としてこの「シンドバード」テキストに近い写本が、フランス国立図書館に2点ある。

一つは複数の物語が含まれた写本で、ヒジュラ歴1089年（西暦1678年）にナスルッラー (Naṣr allāh ibn al-Ḥajj Ni'ma) が書き終えたという署名入りの BnF arabe 3667である。ただし、「シンドバード」に関しては、第7の旅の後半の一部が欠けている。もう一つは、元々ガランの写本コレクションの中にあつたもので、同じく17世紀におそらくヨーロッパ人が書き写した、BnF arabe 3645である。両者の内容は非常によく似ているので、原本と複本の関係とも考えられる⁶⁸⁾。サッバーグは、これらに類

65) Langlès, 1814: xxiii.

66) Langlès, 1814: xxiii. Savary, M. / Langlès, L., 1813.

67) さらに言えば、『千夜一夜』の初のアラビア語刊本である、カルカッタ第1版 (Shirwanee, 1814-18) の第2巻に収録された「シンドバード」のアラビア語テキストは、このラングレーによる印刷版が元になっている。

68) Vajda, 1940-1969: 16-20, 42. Chauvin, 1900: 200.

する「シンドバード」のテキストをコサン・ド・ペルスヴァルに提供する一方で、サントペテルブルク写本の一部として取り入れていたのかもしれない⁶⁹⁾。

サントペテルブルク写本は、「シンドバード」の直後に「タージルムルーク」「アジーズとアジーザ」の2編を配置している。いずれも、エジプト系写本では「ウマル・ブン・ヌウマーン」中の挿話であり、マイエ写本⁷⁰⁾でも同様の形で収録されている。これらはパリ写本には含まれないが、サントペテルブルク写本では、独立した話として、おそらくマイエ写本から取り入れられたと思われる。

以上をまとめると、2つのサッバーグ写本と、他の写本および翻訳等との関係は、図2ようになる。

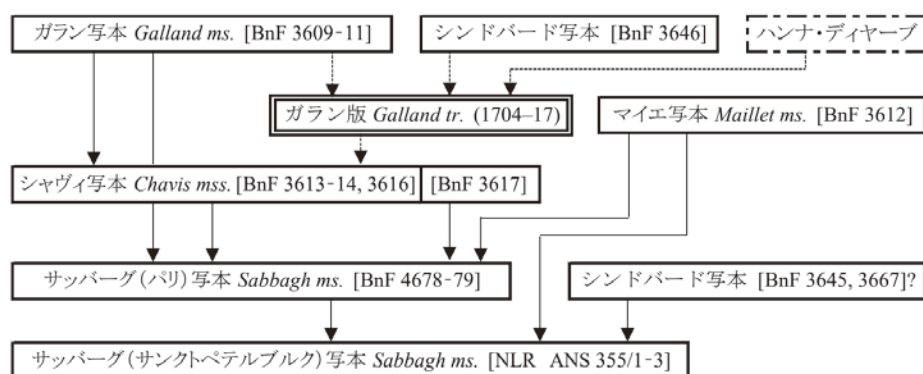


図2 2つのサッバーグ写本の典拠

4. 結び

以上、2つのサッバーグ写本の内容と特徴を見た。シリア系写本とガラン版の内容にエジプト系の挿話を加え、さらに両写本が完全に一致しないよう一部変更を施した、寄せ集めの完全写本ということになる。当然『千夜一夜』写本の従来の系譜には位置づけることができない。しかしこれらは、サッバーグが当時の国立図書館で参照できた写本をもとに、細心の注意を払って編纂した写本であった。サッバーグの残した写本とは、ガラン版が生み出しヨーロッパで受容された『千夜一夜』のイメージと、クライアントであるヨーロッパ人が求める「既存のものとは違う1001夜完備写本」という、二つの仕様を満たすべく行われた、職人的な編纂作業の結果ではないだろうか。

彼の置かれた立場や同時代人の証言から見てくるのは、経済的には恵まれない

69) もっとも「シンドバード」の典拠を確定するには、より詳細な校合や関連情報の精査が必要であり、現時点で断定的なことは言えない。「シンドバード」写本のバリエーションについては、西尾 (2019, 第2巻: 290-297) を参照のこと。

70) Chauvin, 1900: 197-98.

中、図書館や東洋学者個人から依頼を受け、その要望に丁寧に応えていたサッバーグの姿である。ダマスカスとカイロで勉学を修め、修道院を訪問し、フランス軍の将軍や東洋学者の権威達から学識と人柄を買われた、——超一流ではなくとも——知識人といえる人物である。ナポレオンにもルイ18世にもアラビア語の讃歌を献呈しているところを見ると、彼には日和見的な調子のよさがあったのかもしれない。また、悪意の有無はともかく、巧妙に写本を作り変えて、それをバグダードやエジプトに由来する写本の写しであると思せかけたのは、事実である。現代の感覚からすれば虚偽の記載や捏造となろう。しかし実際のところ、こういった行為にさほどの見返りはなく、彼は短い生涯を通じて、大きな財産を築くことも高い地位を得ることもなかった。そもそも私的な依頼のもと、一個人のために作られた『千夜一夜』写本の奥書や説明は、付加価値を与えるための広告程度だったかもしれないし、依頼主の要望に忠実に、あるいは過度に応えた結果のフェイク、という可能性もないわけではない⁷¹⁾。

いずれにしても、中東アラブ世界において『千夜一夜』は、著者のいる正統な文学作品とは全く異なるジャンルに属するもの、と認識されてきた⁷²⁾。それは、即興を駆使する語り部と同様、誰もが変化を加えアレンジすることを許された気楽な夜伽話（*ʿasmār*）であり、人を喜ばせる娯楽の一演目であった。サッバーグの仕事はこの原点の延長上にあり、ヨーロッパ人が喜び満足する『千夜一夜』を創り出すことこそが、彼にとっての重要な使命だった、という見方もできる。

こうしてパリは、図らずもシリアとエジプトに次ぐ、新しい『千夜一夜』の供給地となった。その主要な担い手は、オスマン帝国下のシリア・エジプトからフランスに移ってきた、アラビア語を話すキリスト教徒たちである。彼らは、パリの東洋学者のサークルにおいて、アラブ・イスラーム世界に関する貴重な情報源であり、学問的業績を陰で支える人材として重宝されたが、国家体制の変化や政治的混乱に翻弄される、経済的には不安定な人々であった。サッバーグも、ある意味、生き延びるために写本を編んだ。パリで作られた偽写本と呼ばれるいくつかの『千夜一夜』写本は、シリア系とエジプト系という単純なテキスト伝承経路には収まらない、東洋と西洋を行き来した人間たちの交流と、複雑な社会状況が生み出した産物といえる。

71) 充実した内容もち、一見完成度の高い写本であったにも関わらず、コサン・ド・ペルスヴァールはこのパリ写本に基づく校訂版や翻訳を出版することはなかった。サンクトペテルブルク写本にも、アンペールの引用したごく短い断章を除いて、校訂版や翻訳はない。

72) ヨーロッパ人の学術的関心が高まるまで、「アラブの知識人たちは、口承文藝としての『千一夜物語』を純文学とは区別し、大衆が喜ぶ荒唐無稽で低俗な娯楽作品という低い評価しか与えてこなかった」（杉田, 2012: 4）。

資料：ルイス・シェイホー著「ミシェル・サッバーグとその家族」⁷³⁾

“ميخائيل الصباغ وأسرته” للأب لويس شيخو اليسوعي

この国にはいくつかの高貴な家族があり、そのうちのいくつかは何百年も前にさかのぼる。ただ、もしあなたがその家族長たちに真の歴史や正確な詳細を求めるなら、彼らはそれにたじろぎ、時の移ろいをのろうだろう。というのも、そういった時代の流れにおける予想外の事態が、これらの情報を失わせ、「ハバル・カーナ」（過去の叙述）の内に押し込めてしまったのだから。

我々が彼らの一代記を知り、彼らやその祖父たちの詳しい情報を記録することができればと望む、そのような人々の中に、メルキト派ギリシア典礼カトリック教徒 (الروم الكاثوليك الممكيون) の一人の東洋人がいる。彼は、その文学的素養によりパリで有名になり、東洋学に対して賞賛に値する貢献をなした。彼は、東洋学者たちが我々の国の遺産を研究することに活気づいた際、彼らを手助けした一人であった。そう、彼こそが知性あふれる文人ミシェル・サッバーグである。死の運命がまだ水気のあった彼の若さの枝を折ってしまい、彼は約90年前に亡くなった。もし数少ない業績の残部やばらばらの有益な成果がいくつかの大図書館に見られなければ、彼の名はほとんど彼とともに墓の中に埋もれていただろう。そこで我々は、それら（彼の生きた証）が失われることを恐れ、ここにこれらの真珠の粒を集めて一本の糸につなぎ合わせようと試みた。

我々は、昨年の夏期にバイエルンの首都にある諸写本を閲覧していた時、ミシェル・サッバーグの直筆による、ばらばらになった紙の書類束を手にすることができた。その全体には、サッバーグ家の起こりから彼の時代までの情報が含まれているが、彼の祖父イブラーヒームに関する話に大きな紙幅が割かれていた。イブラーヒームは、ザーヒル・ウマル (ظاهر العمر) と彼の執事を診る侍医として、アッカでは有名であった。だから、我々はこれらの文書の存在にどれほど喜んだことか。またそれがどのようにミュンヘン図書館までたどりつき、忘却の片隅にとどまっていたのかと驚嘆した。だが我々はこの調査の後、さらにその問題を追及した。そして名だたる東洋学者の一人、フランス人学者ド・カトルメール⁷⁴⁾がミシェル・サッバーグ

73) Cheikho, 1905. 訳出にあたり、人名や地名の片仮名表記については定冠詞を省き、初出時に本文通りのアラビア文字表記を併記する。また、本論全体における名前の統一、および別人のミーハイールとの区別のため、ميخائيل الصباغ に対しては「ミシェル・サッバーグ」の呼称を使用する。脚注はすべて訳者によるものであり、原注は本文の中に含める。本論は3部からなり、(1) は主にミシェル・サッバーグ本人の手稿をもとに、祖父イブラーヒームを中心とするサッバーグ家の歴史を、(2) は彼と同時代人の、あるいは後世のヨーロッパ人が著した欧文献をもとに、ミシェル・サッバーグの伝記をまとめている。(3) は断片的ではあるが、彼の末裔による情報を集めたものである。

74) フランス人東洋学者、エティエンヌ・マルク・カトルメール (Étienne Marc Quatremère, 1782-1857) のこと。シルヴェストル・ド・サシのもとでアラビア語を学び、1807年から国立図書館の写本課で働いた。サッバーグとはほぼ同時期に同じ部署で仕事を始めた同僚ということになる。カトルメールは蔵書家でもあり、そのコレクションの一部が現在のバイエルン州立図

の死後、彼の写本の一部を購入したことがわかった。ド・カトルメールは文学と東洋語書籍の愛好家であった。そして彼が1845年に亡くなった時には、ミュンヘン市が彼の貴重な蔵書を買取った。その中に、今我々が話題にしている書類があったのである。ここで我々は、その概要を、我々の東洋図書館の諸写本および印刷された歴史書において得られた内容と合わせて述べる。まず最初に我々は、サッバーグの家族の情報を本伝記の主人公の時代まで描写し、次に我々の情報が到達した通りに、ミシエルの伝記を続けて補完する。最後に我々は、今日までにサッバーグ家がシリア・エジプトへ分散したことに関する要約の一節を付け加える。

(1)

ミシエル・サッバーグは彼の家族の起源について、概略次のように語った。この家の原点は、シュワイル (الشوير) 地区のケセルワーン (كسروان) 山⁷⁵⁾にある。話はこうだ。この村に、裕福かつ信心の深さで有名な、ユースフ・マルイー (يوسف مرعي) という男がいた。彼は、村の三分の二の土地と絹の生産量のすべてを所有するほどの金持ちだった。それから彼はさらに富を増やし、村の残りの土地を買った。それは西暦1630年のことだった。ユースフは、メルキト派ギリシア典礼カトリック教徒で、その宗派に強い帰属意識をもっていた。彼とハーズィン家 (الحازن) ⁷⁶⁾の長老たちとの間には友好関係があった。

彼の後には、息子のユーハンナー (يوحنا) が立身した。彼は、洗礼者聖ユーハンナー (ヨハネ) (القدیس یوحنا الصابغ) の名のもとに建てられた村の教会⁷⁷⁾にちなんで、シュワイルの洗礼者ユーハンナー (يوحنا الصابغ الشويري) という名で知られるようになった。ユーハンナーには息子たちと娘たちがいた。長子の名はアッブード (عبود) であった。アッブードは統治者たちのもとで頭角をあらわし、また姉妹たちを父方の従兄弟たちと結婚させた。彼にはユースフ、ミーハーイール、ハビーブ (حبيب) という3人の弟がおり、ハビーブが末弟であった。

それから、アッブードと彼の姉妹の夫にあたる彼の従兄弟たちとの間に、もめごとが起こった。すると彼は、シュワイルに居住することを拒み、彼の不動産と弟たちの財産を売り払って、バイルートに移り住んだ。彼らはみな独身であった。そして、アッブードはしばらくの間、商売をしながら弟たちとともに暮らした。その後、

書館に収められた。ここで述べられているように、この手稿以外にも、サッバーグが筆写した複数の写本が同図書館に所蔵されている。

75) 現在のレバノン中部、レバノン山岳県マトン郡にドウフル・シュワイル (ضهور الشوير) という地名があり、この付近の一帯を指すと思われる。マトン郡の北にはケセルワーン郡が隣接しているが、本文に見られるケセルワーン山の具体的な場所はわからない。いずれにしても、キリスト教徒の住民が多数を占める、山岳の村とみられる。

76) 16世紀以降ケセルワーンを本拠地とした、キリスト教マロン派の名家。

77) 現在のヒンシャーラ (الحنشارة) 市にある、メルキト派教会「洗礼者聖ヨハネ修道院」(دير مار يوحنا الصابغ) のこと。アブドゥッラー・ザーヒル (عبد الله زاهر) がアラビア文字の活版印刷機を導入し、1734年にフアン・エウセビオ・ニーレンベルグ神父 (Juan Eusebio Nieremberg, 1595-1658) の著作 *De la diferencia entre lo temporal y eterno* のアラビア語訳「ميزان الزمان」を出版した場所としても知られる。

アップードは彼の弟のユースフとも不和になり、アップードはユースフに彼の取り分を支払い、彼をバイルートに残した。アップードは、二人の弟ミーハーイールとハビーブとともにスール (صور) へ行った。彼らはバイルートに住んでいた期間に、自分たちの名前を変更していたので、人々は彼らのことを軽くサービグ (الصباغ) 家と呼ぶかわりに、サッバーグ (الصباغ) 家と呼んだ⁷⁸⁾。というわけで、ユースフはバイルートにとどまり、彼からその一帯で有名な家系、サッバーグ家が生まれたのである。

ミシェル・サッバーグは、続けて語った。次にアップードはスールへ行き、そこに居住した。そして彼の二人の弟とともに亜麻仁油の製造所を開いた。しかしその町では物事が思うように進まず、アッカに移り住もうと考えた。弟のミーハーイールが同行を断ると、アップードは彼に分け前を与え、1700年、末弟のハビーブとともにアッカにたどり着いた。彼ら二人は売買に従事した。

アップードは非常に敬虔な男性だったので、自らの純潔を神に捧げ、生涯を通して結婚はしなかった。彼は弟ハビーブのことを気かけ、彼を息子のように養育した。また非の打ちどころのない、敬神で有名なアッカの娘と結婚させた。それからアップードはハビーブをダミエッタに送り、ハビーブはそこに9年間とどまった。ハビーブの妻は彼の二人の息子、イルヤース (الياس) とイブラーヒームを生んだが、イルヤースは幼い頃に天然痘で亡くなった。一方イブラーヒームは、1715年頃に生まれ、叔父アップードの保護下で育った。

我々はすでに『マシュリク』誌 (第7巻、958頁および1003頁) において、1753年のハリール・サッバーグ (خليل الصباغ) によるシナイ半島トゥール (طور) への旅について述べた。彼のミスルからシナイへの旅は、すでに述べた通りである。またこのハリールは、彼の話やシリアの言葉使いや何人かのシリア人についての言及からもわかる通り、シリアの出身である。おそらく彼は前述のハビーブの息子の一人だが、我々はミシェル・サッバーグの文書中に彼に関する記述を見つけることはできなかった。

(ハビーブの) 息子イブラーヒームの年齢が7歳になった時、彼の叔父アップードは彼をシュワイルの聖ヨハネ修道院へと送った。約20年前からそこに集住し、禁欲生活に身を捧げていた修道士たちのもとで、躰を身につけ教育を受けるためである。イブラーヒームは彼らのもとでしばらくの間暮らし、彼らからアラブ文学と諸科学の基礎を学んだ。

シュワイルの修道院には、プロコピオス神父 (الاب بروكوبيوس) という、医学に長けた修道士がいた。山の住民らは自分たちの病気を治してもらおうと、方々から彼を目指してやってきた。彼はイブラーヒーム・サッバーグに驚くべき賢さと輝かしい知性を見て取った。そこで神父はイブラーヒームに医学の原理を教え始めると、彼はこの学問の勉強にまい進し、とうとう師が「イブラーヒームは偉大なるギリシ

78) 通常の能動分詞形 الصباغ からその強意形 الصباغ への変更ということで、前者が相対的に「軽く」と表されている。

アの医学者たちの仲間に加えられるべきである」と言って、彼を誇るまでになった。こうして、彼の名はシリアの国に広がり始めた。彼は、他の医者には難しい病気の治療も行い多くの人を癒した。

彼が名を上げた理由の一つに、次のような話がある。かの有名なザーヒル・ウマルがその当時不治の病を患っていたが、彼の侍医でギリシア正教徒のスライマーン・サウワーン (سليمان صوّان) はそれを治すことができなかった。すると、ザーヒルの侍従であるメルキト派の聖職者ユースフは、スライマーンに対して、使いをやってイブラーヒーム・サッバーグを呼び寄せてみてはどうか、そうすればおそらく彼が主君の病気を治してくれるだろうと告げた。そしてスライマーンはその通りのことを行い、イブラーヒームに治療を頼んだ。彼がやってきて、すぐにザーヒルの治療にあたったところ、わずかな期間で彼を癒した。

すると、ザーヒルはイブラーヒーム・サッバーグを厚遇し、寛大な褒美を与えた。またザーヒルは、彼と侍従たちの侍医としてイブラーヒームを登用した。一方イブラーヒームも、神が自らに成功を与え給うたのだと考えて、彼のもっとも顕著な功績となった奉納、すなわち彼のミッレット (宗教共同体) の住民のために教会を建てることを望んだ。そこでイスタンブールに書簡を送り、必要な許可を求めると、彼は所望していたものを手に入れ、自費でアッカに聖アンデレの名のもとに教会を建てた。教会の献堂式は西暦1760年であった。彼は大司教に対し、自分のもとへある敬虔な聖職者を送るよう許しを請うた。その聖職者とは、彼が洗礼者聖ヨハネ修道院にいた頃、彼の面倒を見てくれた師と仰ぐ人物であった。すると大司教は彼の求めに応じた。非常に敬虔なイブラーヒームは、夜半の三時間後に起きてはミサに参列し、それから主君のもとへ仕事に出かけた。

イブラーヒームには、ハビーブ、ユースフ、ニーコーラー (نيقولا)、アップードという4人の息子たちが生まれた。彼らが大きくなると、イブラーヒームはハビーブを商人にし [原注：我々はカルメル山の歴史書の中に、このハビーブがカルメル修道会士たちの代表であったことを見つけた。]、アッカの大商人のうちメルキト派の一人、アブドゥンヌール (عبد النور) とともに共同経営を行った。ユースフには、国への奉仕を行わせた。彼の性格がそれに適していたからである。ニーコーラーには、穀物生産の管理を任せた。また自分の傍らで医術の仕事にも従事させ、彼をこの職の後継ぎにしようとした。さらにアップードには、彼が1768年にアッカに設立した石鹼工場を割り当てた。すでに、ハビーブ・アフアンディ・サッバーグ (حبيب افندي صباغ) 閣下が、イブラーヒームのもう一人の息子であり、彼の曾祖父にあたるイルヤースについて、我々に述べているのだが、我々はミシェル・サッバーグの文書中に、イルヤースに関する記述を見つけることはできなかった。

それからイブラーヒームは、アッカで自らの邸宅の建設を始め、それに多くの金を費やした。それが完成する少し前の1771年、すでに70歳を越えていた彼の母親が亡くなった。彼女も、大いに神を畏れる信心深い人物であった。

イブラーヒーム・サッバーグには国内・国外の住民を問わず、多くの友人たちが

いた。その中には、クーンティー・ジュウワーニー・マスキービー (الكونتي جَوَّاني المسكوبي) がいる。この人物は、イブラーヒームのことを大いに気にかけていたため、彼に素晴らしい筆致の3枚の絵を与えた。1枚目は聖マリア (السيدة العذراء)、2枚目は司祭ニコラウス (القديس نيقولاوس)、3枚目は聖ゲオルギオス (مار جرجس) を表している。

貧しさにあえぐ人々が彼のもとにやってきて、助けを求めることもあった。彼らの中には、財産を失ったカヒール家 (بيت الكحيل) の出身で、ギリシア典礼カトリック教会に属する、シリア商人の名士らもいた。彼らがアッカのイブラーヒームに会いに行くと、彼は彼らを自分の家に泊めて、なだめた上、彼らに500もの(金の入った)袋を持たせて故郷に返した。同様に、ホムス (حمص) の住民で、彼の宗派に属する一人の人物の状況も変化した。彼はアップード・バフリー (عبود البحري) と呼ばれていた。彼は子どもたちを連れてアッカにやってきた。するとイブラーヒームは敬意をもって彼を受け入れ、その息子のミーハーイールを養子にした。アップードはホムスへ戻られ、ミーハーイールはイブラーヒームが養育するため、彼のもとにとどまった(『マシュリク』第3号9-22頁のミーハーイール・バフリーの経歴を参照せよ)。また同じように彼が助けた人々の中には、のちにエジプト諸官庁の監督官になったミーハーイール・ファフル (ميخائيل فخر)、メルキト派教徒のミーハーイール・ジャムル (ميخائيل الجمل)、その他がいる。

イブラーヒーム・サッバーグの情報が、ローマ教皇クレメンス13世 (اقليميس الثالث عشر) の耳に達すると、カトリックの教えの強化に対する彼の熱意が、教皇を喜ばせた。そして教皇はイブラーヒームに対し、豪華な贈り物とともに東方の十字架を送った。

すでに『マシュリク』(第3号10-11頁)には、イブラーヒーム・サッバーグの状況がどのように変化したか、またウマル・ザーヒル後の彼の1776年の死がどのようなものだったかが述べられた。我々の東洋図書館には、約80年前に書かれ、「原因と兆候」(の記述)によって特徴づけられる医学書がある。その最初には、「高名な先生であり、医術に熟達し学識も深い、アッカの故イブラーヒーム・サッバーグの筆によって、ある本から筆写され、参照された。その本には序文がなかったために、それが彼の著作であると考えられているが、(実際は) ほとんどは彼がその本を頼りに書いたものであった」とある。すでにコランジェット神父⁷⁹⁾(الاب كولنجت)が『マシュリク』(第4巻79頁)に、その本はイブラーヒームによるものではなく、ナジーブッディーン・ムハンマド・サマルカンディー (نجيب الدين محمد السمرقندي) の著作であると確定したが、それでもいくつかの価値ある内容がそれに加えられた。例えば、彼は「マリース (مليس) と呼ばれる蒸留水には、カルメル山の聖イルヤース修道院の跣足カルメル修道会士らから得られるものがある」などと叙述している(183頁)。この書物は、息子アップードが父イブラーヒームについての素晴らしい仕事と

79) バイルートのサン・ジョゼフ大学医学部教授、グザヴィエ・モーリス・コランジェット神父 (Xavier Maurice Collangettes, 1860-1943) のこと。

述べたもので、彼の医学における能力と、病気や治療法の見立ての巧さを示している。

イブラーヒームの死後、彼の息子たちは散り散りになったが、我々は彼らについて少しのことしか知らない。パリ図書館の蔵書の中に、『ザーヒルの歴史における輝かしい庭園』という題名のアップード・サッバーグの著作 (Mss. Arabes, N° 4610) がある。我々は、その価値ゆえに一部を書き写したのだが、それがイブラーヒームの息子のアップードではなく、彼の孫の一人によるものということは、著者の言葉から明らかである。彼が自らの叔父をユースフ・ブン・イブラーヒームと呼んでいるのがその証左である⁸⁰⁾。この本からは次の役立つ情報が得られる。このユースフはイブラーヒームの息子であるが、ヤーファのカリーム・アイユブ (كريم الايوب) のもとで引き立てられ、カリームはユースフを自分の仕事の管理者とした。その後、ユースフの敵対者の中に彼に復讐をはかる者がいたため、ユースフは彼らから逃れてスールに入った。これは、すでに述べた歴史の中でアップードが語った長い逸話にある内容だ。ミシュルの文書中にある、サッバーグ家において名を馳せた人物の一人は、サムアーン・サッバーグ神父 (الاب سمعان الصباغ) である。イブラーヒームは諸用で彼に書簡を送っていた。我々が思うに、サムアーンはイブラーヒームの甥の一人で、シュワイルの修道士の一員に加わった。

また同様に、我々は誠実な修道士たちの歴史に、アントゥーン・サッバーグ司祭 (القس انطون صباغ) の名を見つけた。彼はイブラーヒーム・サッバーグの時代に生きた人物である。彼がイブラーヒームの親類か否かについて、我々は知らない。上述のアントゥーン司祭は、ヨーロッパの学校でギリシア語を学んだ。彼には、その修道院生活の歴史に関する記述がある。

以上が、我々が得ることのできたミシュルより前のサッバーグ家の歴史で、我々が本稿で特に述べたかったことである。

(2)

ミシュル・サッバーグは1775年頃に生まれた（これは、アンペールが彼の著書『詞華集』(294頁)⁸¹⁾の中に書いた「1784年頃の生まれ」よりも信頼できる）。彼は前述のザーヒル・ウマルの侍医であったイブラーヒーム・サッバーグの孫である。父の名は、ニークラー・ブン・イブラーヒーム・サッバーグである。ミシュルの出生地はアッカであったが、幼少期はダマスカスで過ごした。この少年は学問をこよなく愛し、初等学校では言語の基礎を学び、それから家族や何人かの地元の先生のもとで文学の教育を受けた。彼はアラビア語とその諸分野である形態論・文法学・弁論術・韻律論・作文法を習得した。また、シリアの様々な方言も知っていた。後で見るように、彼にはそのすべてに関する著作や文書がある。

80) この人物は、ミシュル・サッバーグの兄アップード・ブン・ニークラー・ブン・イブラーヒームである。

81) Humbert, Jean. 1819: 294.

『完全なる論考』という題名の著書において(73頁)⁸²⁾、ミシェルはエジプトに入り、先生たちのもとで学んだと述べた。彼が1790年の出来事として、著書『伝書鳩』で言及した人物の一人は、シャイフ・ユースフ・ハラシー (الشيخ يوسف الخراشي) である⁸³⁾。それから1792年にはサイド地方を訪れた。上エジプトにあるムハッラク修道院の院長——彼はアリーの子孫だといわれている——が彼を呼び寄せたので、そこに夏の間滞在した。彼は、同院の修道士たちの何人かがコプト語で話しているのを聞いた⁸⁴⁾。

それから彼はシリアに戻り、前述の『論考』で述べているように(8頁) 1794年にはスールを通った⁸⁵⁾。ところが事情で、彼はエジプトへ戻らなければならなくなり、カイロやダミエッタやアシュートなどの諸都市を巡った。彼はエジプトのシャイフ達、ウラマー達と面会した。その中には名高い先生であるシャイフ・スライマーン・サブウ (الشيخ سليمان السبع) がいる。また同様に、彼はコプト教徒でアシュート生まれのアルユース (エリアス)・ボクトル (أليوس بقطر) と知り合いになった。彼は、ナポレオンが自らの専属通訳として雇っていた人物である。そして二人の間を、確かな親愛の情と清らかな友情が結んだ。アルユースは彼の友人の意欲を掻き立て、彼に執筆や著作の仕事を任せると、ミシェルも彼の依頼に応じていた。

彼がエジプトで出会った人物の中に、フランス人の将軍レイニエ (Regnier [sic]) がいる。この人物は彼の能力を高く評価し、その幅広い知識を気に入った。そして彼を書記として採用した。将軍が1801年にパリへ戻る時、ミシェルにパリまで同行するよう提案すると、彼はそれに同意した。

当時、東洋学の講義はヨーロッパの各地でそれほど普及していなかった。知られているのはごく少数の人々で、そのうちの一人が、高名な学者であり、学識の深い文人であり、熟達した言語学者である、シルヴェストル・ド・サシ男爵である。彼のもとで東洋の文学を学ぼうと、ヨーロッパ各地の学徒らが彼を目指してやって来ていた。彼はサッバーグに会うとすぐに目をかけ、生計を立てられるようにできる限り彼を援助した。ド・サシがオリエントの状況や、シリア人やエジプト人の慣習に関する知識が必要になると、彼を訪れ、彼の話を頼りとした。ド・サシは自著の中で度々サッバーグに謝意を表している。

ド・サシの弟子たちもミシェルのもとに来て、彼がもつ知識の恩恵を受けていた。彼は、誰に対しても一切出し惜しみする人物ではなかった。当時パリにいた有名なドイツ人東洋学者も彼のことを褒め称えている。この学者は、『東洋の詩歌』(Carminum Orientalium Triga) という題名の本の序文で、「アッカのミシェル・サッバーグは彼の祖国の文学をよく知っている人物だった。私は、彼が気前のよい性格で、ムルーア (アラブ人男性としての美德) にあふれた人物だとわかった。彼はい

82) Sabbagh / Thorbeche (ed.), 1886 のこと。しかし該当頁にそのような言及はなく、語られているのは、1792年のサイド地方の訪問と滞在についてである。

83) Sabbagh, 1805: 46–47.

84) Sabbagh / Thorbeche (ed.), 1886: 73.

85) Sabbagh / Thorbeche (ed.), 1886: 8.

つでも進んで、私の望むあらゆる労を尽くし、彼の所有する写本について知らせ、私が理解するのが難しい事柄を、実に優しく丁寧に説明してくれていた。また彼は私のために様々な本を書き写してくれた。」⁸⁶⁾

また、ドイツ人のシュヌラーは一度ならず彼の『アラビア語文献』(Bibliotheca arabica)⁸⁷⁾の中で(491頁)、またフランス人東洋学者のラングレー (Langlès) は、「海のシンドバードの旅行記」⁸⁸⁾の序文の中で、彼について言及した。アンペールは著書『詞華集(詩の美しさにおける花摘み)』において、彼を先生と呼び[原注: Humbert: Anthologie arabe, Paris 1819, p. [sic] 291-293 を見よ]、彼の著書はサッバーグの厚意によるものと認めた。アンペールはそこにサッバーグの略歴も載せている。

フランス公営印刷所は、東洋の諸言語の植字工とそれらの印刷物の校閲者を必要としていたので、この職にミシェル・サッバーグを採用した。彼はしばらくの間、そこで東洋の諸学に対し誠実な務めを果たしていた。

それからフランス政府が彼の貢献に報いたいと望み、彼を王立図書館の写字生の一員に加え、また同図書館の東洋語写本の管理者、古くなって傷んだ写本の修復者に任命した。

ミシェルはこの仕事とともに、研究や著述にも熱心に取り組み、また複数の貴重な写本を書き写した。彼の著作の中には、伝書鳩に関する書物がある。彼はそれを『伝書鳩における稲妻と雲の競争の書』と名付け、皇帝ナポレオン1世に献上した。彼は同書の中に、この興味深い主題に関連する事柄を集め、5章に仕立てた。伝書鳩について、その種類、特徴、性質を説明し、さらに伝書鳩を最初に思いついた人と、その飼育法、訓練、これまでに伝えられた伝書鳩を描写した散文や韻文を紹介した。この書は1805年にパリで出版され、シルベストル・ド・サシがそれをフランス語に翻訳した⁸⁹⁾。その後、カッタネオ (A. Cattaneo) 教授がこの書をイタリア語に翻訳し、1822年にミラノで出版した。同様に、ロルスバッハ (Lorsbach) がドイツ語に翻訳し、1806年にヘルボルンで出版した。それからレーパー (G. Löper) 氏がその出版を繰り返し、またそれに補遺を加え、1879年にシュトラスブルクで出版した。

彼の著作の中にはまた、その種のものでは誰一人彼に先立つ者がなかった、唯一無比の書物がある。彼はそれを『民衆の言葉に関する完全なる論考と口語(通俗語)の状況に関する課程』と名付けた。我々は最近ヨーロッパを旅した際に、ミュンヘンの図書館でその本を見つけた。我々はそれを良書とみなし、その有益さから印刷によって広まれば望ましいと考えた。ところがその後、我々は有名なトルベケ (H. Thorbecke) 博士がすでに1886年以降、その印刷に向けて進んでおり、ゴータの印刷所の一つより、シュトラスブルクで出版していたことを知った。この本は、ミシェル・サッバーグが友人のアルユース・ボクトルの勧めに応じて、1812年に書いたも

86) Kosegarten, 1815: 28-29.

87) Schnurrer, 1811: 491-93.

88) Langlès, 1814: xxiii.

89) Sabbagh, 1805. サッバーグによるアラビア語本文とド・サシによるフランス語訳の対訳形式で出版された。

のだ。彼は10章の中に、口語に直接関係するあらゆることを含め、ヒジュラ以前の口語の歴史も加えた。さらに、彼は口語に生じた様々な方言バリエーション——例えば音の省略⁹⁰⁾、音の付加⁹¹⁾、音位転換、語の前置、語の後置、外来語——のすべてを記述している。また彼は、言語のすべての研究分野——例えば名詞、代名詞、動詞、小詞、それらの口語の語形変化——について研究している。おそらく彼はシリア・エジプト・ヒジャーズ・マグリブにおける様々な方言間の比較を行った。彼はこれらの章を、数々の口語語彙に対する大きな表で締めくくっており、その語彙を辞書のアルファベット順に並べ、解説している。なお、彼が本の最後に記したものの中に、素晴らしい一節がある。それは有意義な内容であるので、中から数行を引用しよう。彼は次のように言った（71-72頁）。

以下のことを知みなさい。我々が数多くの歴史を紐解いてみると、昔のシリアの人々の言語はシリア語であったことがわかった。彼らはそこにギリシア人が入ってくるまで住んでいたが、民衆が話すのはシリア語であった。名士たちは、（・・・）二つの言語を話していた。彼らにはそのことが必要だったからだ。（・・・）こういった状態はイスラームの到来まで続いたが、シリア語は少しずつ廃れていき、とうとうその国の全員がアラビア語を話すまでになった。シリア語はシリア全土から消えてしまった。しかし私は、救世主修道院 (دير المخلص) の修道士たちの支柱である、司祭のミーハーイール・アッラージュ (ميخائيل عراج) 神父が私の叔父イルヤースに話すのを聞いていた。その時、叔父は神父にシリア語のことについて尋ねた。すると神父は、マトン (المتن) という名の山岳地域があり、そこで、彼らの言語であるシリア語を今も記憶し、互いにその言語で話す2、3の家を見たといった。[原注：マアルーラと近隣のいくつかの村の住民が今日もなおシリア語で話しているのは、有名である。]（・・・）また同様にエジプトにも、彼らの話し言葉があった。我々がマクリーズイー (المقريزي) やマワーキディー (المواقدي) 他から伝えられて知っているように。それはコプト語であった。エジプトの統治者がギリシアからやってくると、エジプトの名士たちは（ギリシア語とコプト語の）二つの言語に堪能でなければならなくなった。そして彼らはそれら二言語を話すようになった。さらにイスラームが到来すると、コプト語の使用は減り、アラビア語の使用が増えた。やがてアラビア語はエジプト全土に広がった。

さて、ミシェル・サッパグには他にも著作があり、それらは写本の形で残っている。その中に、遊牧民の諸部族の歴史があり、また別のシリアとエジプトの歴史がある。我々は本論の冒頭において、ミュンヘンの図書館に所蔵されている手稿の書類について述べた。そこには、文学の名文選集と彼の祖父イブラーヒーム・サッパグの歴史とギリシア典礼カトリック教会の歴史の概要が含まれている。

90) 語末母音や声門閉鎖音の脱落など。

91) 進行を表す未完了形への接頭辞 bi- や語頭への声門閉鎖音の付加 (jā'に対する'ija) など。

また、ミシェル・サッバーグの足跡として、彼が大学者シルヴェストル・ド・サシのために詩や韻律について書いた、ザジャル・ムワッシャハ・マワーリーに関する補遺付きの書物もある。[原注：ド・サシの蔵書カタログの第1巻 *Catalogue de la Bibl. du Baron de Sacy, I, (Mss ar. n° 133)* を参照せよ。また、*Freytag: Darstellung d. arab. Verskunst. p. 458* も参照せよ。]

ミシェル・サッバーグはまた、いくつかのカスィーダやムワッシャハを作ったが、彼の詩は彼の散文より劣る。アンベールが『詞華集』(34頁)で語った中に、サッバーグが騎馬を描写した次の言葉がある。

وَطِرْفُ يَفُوتُ الطَّرْفَ مَوْضِعُ وَقَعِهِ إِذَا سَارَ خَلَّتْ الرِّيحُ وَالْبَرْقُ رَدْفَهُ
تَرَى ادْهَمًا ذَا غَرَّةٍ وَمَحْجَلًا دُجَى الْبَرْدِ وَالْبَدْرُ بِالزَّهْرِ حَقُّهُ

またサッバーグの詩の中には、法務大臣が公営印刷所を訪れた際、彼のために詠んだカスィーダがある。それは1803年に印刷された。

دهشتُ لرؤية وجهك الابصارُ وأضتُ لرأية مجدك الامصارُ
هذي العروسة يا سليمان انجلت في حسننها ولها الفخارُ شعارُ

1804年の終わり、ナポレオン1世の戴冠のため、ローマ教皇ピウス7世がパリに到着した時、ミシェルはラー (rā') の脚韻をもつカスィーダにおいて教皇を称えた。それは1805年に美しく印刷された。これがそのカスィーダの冒頭である。

اليوم تحسدنا الملائك في السما لما نرى ممَّا العقول تحارُ
سامح نواظرنا اذا بك كثررت نظراتها او زادها التكرارُ

別のいくつかのカスィーダも彼のために印刷された。そのうちの一つは、彼が1810年のナポレオンの婚礼の日に詠んだカスィーダで、シルヴェストル・ド・サシがフランス語に翻訳した。また彼には、ナポレオンがローマの王と呼んだ、彼の息子の誕生の際に捧げた讃歌がある。

هَلُّوا فِي الْاَرْضِ يَا كُلَّ الْاُمَمِ وَاهْتَفُوا فِيهَا بِالْحَانَ النِّعَمِ

この讃歌は1811年に出版され、グランジュレ・ド・ラグランジュ⁹²⁾がフランス語に翻訳した。ルイ18世が王位についた時も、ミシェル・サッバーグは讃歌で彼をたたえた。その冒頭で彼はこのように詠んだ。

ان نَطْرُ حَقًّا سُرُورًا لَا عَجَبُ

これらのカスィーダを参照した者は、ミシェル・サッバーグが詩作の技には長けていなかったことがわかるだろう。しかし、ヨーロッパ人らは彼の創作に東洋的な比喻と独創的な意味を見出していた。彼の詩がヨーロッパ人を喜ばせたのは、とりわけそれが彼らの言語に翻訳された後であった。

我々が述べた諸作品は、ミシェル・サッバーグの熱意に沿ったものではなかった。むしろ彼は、貴重なアラビア語の本を書き写して夜を過ごしていた。それは、出版用に準備するため、またそれらの複本を作ること、ド・サシやコサン・ド・ペルスヴァルやコーゼガルテンやボドゥフなど東洋学者たちの役に立つためであった。

92) フランス人の東洋学者 (Grangeret de Lagrange, 1790–1859)。

アンベールが述べたように (293頁)、これらの写本の数60冊余りに達していた。彼は「これらの書写された本のいくつかは、サイズも大きく、巻数も多かった」と言っているのだが、それについて詳しいことは何も言及していない。我々はド・サシの蔵書目録やパリの国立図書館の目録その他に、次の書物を見つけた。アブー・ファラジュ・イスファハーニーの『歌の書』(الاعاني لابي الفرج الاصفهاني)、マイダーニーの『金言集』(مقامات)、(مجمع الأمثال للميداني)、『ハリリーのマカーマート』(الحريري)、バクリーの『諸道諸国誌』(كتاب المسالك والممالك للبكري)、ヤークート・ハマウィーの『ムシュタリク』(المشترك لياقوت الحموي)、アブー・フィダーの『諸国年代記』(عجائب الآثار)、(تقويم البلدان لابي الفداء)、(اللباكوي)、『カリーラとディムナ』(كليلة ودمنة)、『ムアッラカート』(المعلقات)、ド・スラーンが彼の校訂版の序文に語った通り『イムル・カイスの詩集』(ديوان امرئ القيس)、『アブー・タンマームのハマーサ詩集』(حماسة ابي تمام) である。後は、これらの写本が、彼の鳩胸のような熱意とアラブ人の遺産と著作に対する飽くなき関心を示す証拠であると述べれば、十分だろう。

ミシェル・サッバーグが死亡したのは1816年のパリであった。彼は貧しく、自分の葬儀費用を賄う財産も残さずに亡くなったと伝えられている。しかし、功績を残した人物たちは、神のもとで自らの報酬を失うことはないだろう。我々が思うに、ミシエルの年齢は41歳くらいであった。アンベールや彼に依拠した者たちの考えによれば、32歳である。ただこれは、伝えられているような、彼の著作物に基づく生涯の業績とは辻褄が合わない話である。いずれにせよ、神は壮年を迎えた彼を、その最盛期のうちに御許へと召されたのである。なお我々は、彼が結婚したという証拠は持ち合わせていない。

(3)

我々に残った仕事は、サッバーグ家の末裔から伝わるわずかな言葉をもとに、アラブ文学にとってその死が惜しまれる、故ミシェル・サッバーグの経歴を付け加えることである。我々は前に、パリの図書館に保管されている、ウマル・ザーヒル [sic] の歴史に関するアップード・サッバーグの著作について述べた。上述のアップードがこの名で有名なミシエルの叔父か、彼の従兄弟の一人だったかはわからない⁹³⁾。

我々がこの家系について得ることができた情報の結末は、山間部に住むメルキト派カトリック教徒の名士らの一人、ハビーブ・アフアンディ・サッバーグ閣下が我々に語った話である⁹⁴⁾。彼は、サッバーグ家は今日エジプトとシリアに言い、それから我々にこう伝えた。すでにその情報を記したイルヤース・ブン・イブラーヒーム・サッバーグは、ユースフとサムアーン・サッバーグという二人の息子を残

93) すでに述べたように、この著者はミシエルの兄アップードである。

94) ハビーブの情報に基づいて作成した、図2のサッバーグ家系図2も参照のこと。ハビーブはイルヤース・ブン・イブラーヒーム (ミシエルの叔父) の曾孫ということであるが、父および祖父の名前が明記されておらず、この家系図に位置づけることができなかった。

した。

サムアーンにはミーハーイルが生まれたが、彼はバイルートで子孫を残すことなく亡くなった。それからジュブラーン (جبران) が生まれた。彼はエジプトの医師である。次にイルヤースが生まれた。彼はベクの称号を得たエジプト政府の役人である。

ユースフ・ブン・イルヤースは、ハビーブ、イルヤース、イブラーヒーム、ミーハーイールという4人の息子をもうけた。イルヤースは幼くして亡くなった。高名な商人であったハビーブ・ブン・ユースフには、ハリール、イブラーヒーム、イルヤース、ミーシャール (ميشال) という4人の息子ができた。彼らのうち、ハリールとミーシャールはこの世を去り、主のもとへ送られた。故イブラーヒームは、ユースフ、イブラーヒーム、アブドゥッラー、フィーリーブ (フィリップ) (فيليب) という息子たちを残しているが、彼らはシリアのダマスカスに住んでいる。ミーハーイールには、サリーム (سليم) が生まれ、またサリームには何人かの娘と、ハリールを生ませたユースフがいる。

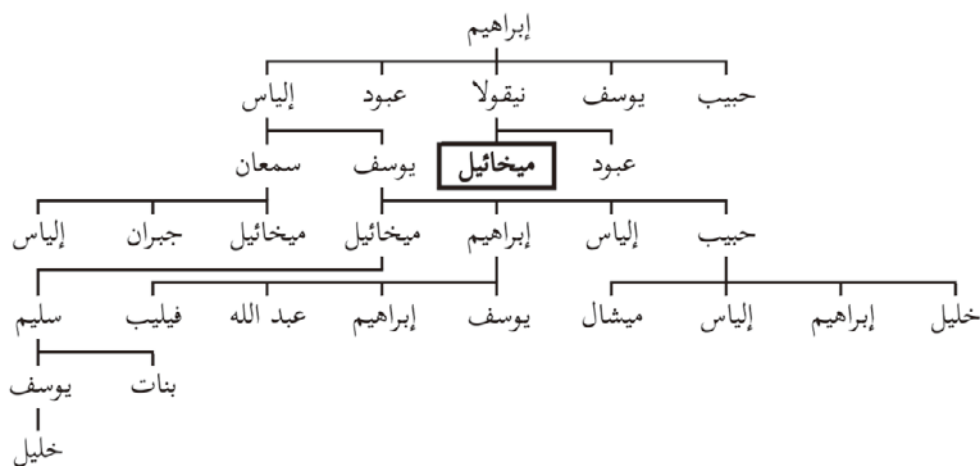


図3 サッバーグ家系図2（イブラーヒーム以後）

この家族には、アタナシオス・サッバグ (اثناسيوس صباغ) という人物がいたが、彼はある期間、救世主修道会 (الرهبانية المخلصية) の長をつとめている。それから彼は1894年の4月にアッカの司教となり、1899年の6月初頭に亡くなった。彼とイブラーヒーム・サッバグとの系譜関係については、わからない。

さらにエジプトには、サッバーク家出身の商人たちがいる。彼らはそこへ移り住み、仕事で成功を収めた。我々は、彼らの中でアントゥーン・サッバークを知っている。彼は皮革を扱う商人で、サウファル (صوفر) に建物を建てた。彼には兄弟がおり、そのうちの一人はハニーン (حنين) という。タンタには、この家からジュブラーン・サッバーク (جبران صباغ) と彼の甥のイブラーヒームの両氏が輩出している。

以上が、我々が収集できたこの名家の系譜である。締めくくりとして、この小論

の読者諸氏が、本文中に生じた瑕疵を修正してくださり、その内容を我々にお送りくださるよう、お願い申し上げます。完全なるものは神をおいてなし。

〔参考文献〕

- 青柳悦子 2009.『デリダで読む『千夜一夜』』新曜社。
 杉田英明 2012.『アラビアン・ナイトと日本人』岩波書店。
 菅瀬晶子 2009.『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』
 溪水社。
 西尾哲夫 2011.『世界史の中のアラビアンナイト』NHK 出版。
 西尾哲夫（訳）2019-2020.『ガラン版千一夜物語』全6巻。岩波書店。
 前嶋信次・池田修（訳）1966-1992.『アラビアン・ナイト』全18巻＋別巻。平凡社。
 ロバート・アーウィン（西尾哲夫訳）1998.『必携アラビアン・ナイト——物語の迷宮へ』
 平凡社。
- Akel, Ibrahim. 2016. Liste des manuscrits arabes des *Nuits*. In Chraïbi (ed.), 65–114.
 Aumer, Joseph. 1866. *Die arabischen Handschriften der K. Hof- und Staatsbibliothek in München*. München.
 Boethor, Ellious. 1828. *Dictionnaire Français-Arabe*. Paris: Firmin Didot Père et Fils, libraires.
 [Caussin de Perceval]. 1836. *Catalogue des livres imprimés et manuscrits, grecs, hébreux, arabes, persans et turcs, composant la bibliothèque de feu M. Caussin de Perceval*. Paris: Chez Merlin, Libraire.
 [Caussin de Perceval]. 1871. *Catalogue des livres et manuscrits arabes, des ouvrages de littérature et d'histoire composant la bibliothèque de feu M. Caussin de Perceval*. Paris: Adolphe Labitte, Libraire.
 Chauvin, Victor. 1900. *Bibliographie des ouvrages arabes ou relatifs aux Arabes publiés dans l'Europe chrétienne de 1810 à 1885, tome IV, Les Mille et une nuits (1re partie)*. Liège: H. Vaillant-Carmanne imprimeur.
 Chavis, Dom Denis and Cazzote, Jacques. 1788-89. *Continuation des mille et une nuits*. Geneva: Barde, Manget et Compagnie.
 Cheikho, Louis. 1905. Mīkhā'il aṣ-ṣabbagh wa-'usratu-hu. *Al-Machriq* 8, 24–34.
 Cheikho, Louis. 1991 [1924–26]. *Tārīkh al-'ādāb al-'arabīya fī al-qarn at-tāsi' 'ashar wa-ar-rub' al-'awwal min al-qarn al-'ishrīn*, 3rd ed. Beirut: Dār al-Mashriq.
 Chraïbi, Aboubakr. 2016. *Arabic Manuscripts of the Thousand and One Nights*. Paris: Espaces & Signes.
 Fleischer, Heinrich L. 1827. Remarques critiques sur le premier tome de l'édition des Mille et Une Nuits de M. Habicht. *JA* 11, 217–38.
 Государственная ордена трудового красного знамени публичная библиотека им м.е. салтыкова-щедрина, Отдел рукописей. *Арабские рукописи, новая серия собрание, опись фонда*. [State Order of the Red Banner of Labor Public Library named after M.Ye. Saltykov Shchedrin, Manuscript department, *Arabic manuscripts, new series collection, inventory of the fund*.]
 Grotzfeld, Heinz. 2004. The Manuscript Tradition of the Arabian Nights. In Marzolph and Leeuwen (eds.), 17–21.
 Humbert, Jean. 1819. *Anthologie arabe, ou Choix de poésies arabes inédites*. (*Kitāb 'iltiqāt al-'azhār fī maḥāsin al-'ash'ār*). Paris, Treuttel & Würtz.
 Irwin, Robert. 1994. *The Arabian Nights: A Companion*. London: Penguin Books.
 Kallas, Elie. 2015. Aventures de Hanna Diyab avec Paul Lucas et Antoine Galland (1707–1710). *Romano-Arabica* 15, 255–67.

- Kosegarten, Hans Gottfried Ludwig. 1815. *Carminum Orientalium Triga. Arabicum Mohammedis ebn Seidennâs Iaameritae. Persicum Nisâmi Kendschewi. Turcicum Emri*. Stralsundii: Sumtibus C. Loeffleri.
- Langlès, L. 1814. *Les voyages de Sind-bâd le marin, et la ruse des femmes, contes arabes*. Paris: Imprimerie impériale.
- Macdonald, Duncan B. 1922. A Preliminary Classification of Some MSS of the Arabian Nights. In T. W. Arnold and R. A. Nicholson (eds.) *A Volume of Oriental Studies Presented to Professor E. G. Browne*. Cambridge. 304–321.
- Mahdi, Muhsin. 1984. *The Thousand and One Nights (Alf Layla wa-Layla) from the Earliest Known Sources*, Part 2. E. J. Brill.
- Mahdi, Muhsin. 1994. *The Thousand and One Nights (Alf Layla wa-Layla) from the Earliest Known Sources*, Part 3. E. J. Brill.
- Marzolph, Ulrich and Leeuwen, Richard van (eds.) 2004. *The Arabian Nights Encyclopedia*. 2 vols. ABC-Clio.
- Messaoudi, Alain. 2015. *Les arabisants et la France coloniale. 1780–1930: Savants, conseillers, médiateurs*. Nouvelle édition. Lyon : ENS Éditions.
- An-Nadîm, 'Abû al-Faraj Muḥammad bn 'Abî Ya'qûb Ishâq. / Riḍâ Tajaddud (ed.) 1971. *Kitâb al-Fihrist*. Teheran.
- Nakamichi, Shizuka. 2015. Re-examination of Sources for the Second Calcutta Edition of the *Thousand and One Nights*. 『アラブ・イスラム研究』 13, 51–62.
- Pouillon, François (éd.) 2008. *Dictionnaire des orientalistes de langue française*. Paris: IISMM-Karthala.
- Rosen, Victor. 1877. *Les manuscrits arabes de l'Institut des Langues Orientales*. Eggers.
- Российская национальная библиотека (РНБ). 2014. *Аннотированный список фондов отдела рукописей РНБ*. [The National Library of Russia, *Annotated List of Collections of the Department of Manuscripts of the National Library of Russia*.]
- Savary, M. / Langlès, L. (ed.) 1813. *Grammaire de la langue arabe vulgaire et littéraire*. Paris: Imprimerie impériale.
- Sabbagh, Michel. 1804. *Poème à la louange de l'empereur Napoléon Bonaparte*. [s.l.].
- Sabbagh, Michel (Mīḥā'il Niqūlā al-Ṣabbāḡ al-'Akkāwī) / Qunṣṭānīn al-Bāshā al-Mukhalliṣī (ed.) 2010. *Tārīḥ al-ṣayḥ Zāhir al-'Umar al-Zaydānī ḥākīm 'Akkā wa-bilād Ṣafad*. Cairo: Sharikat nawābiḡ al-fikr.
- [تاريخ الشيخ ظاهر العمر الزيداني حاكم عكا وبلاد صفد]
- Sabbagh, Michel / Lagrange, Grangeret de. (tr.) 1814. *Cantique de félicitation à Sa Majesté très-chrétienne Louis le Désiré, Roi de France et de Navarre*. Paris, Imprimerie royale.
- [نشيد تهنئي لسعادة الكلي الديانة لويس الثامن عشر ملك فرنسا ونواد]
- Sabbagh, M. / Löper, C. (tr.) 1879. *Die Brieftaube schneller als der Blitz, flüchtiger als die Wolke*. Strassburg: K. J. Trübner.
- [كتاب مسابقة البرق والغمام في سعاة الحمام، ١٨٠٤.]
- Sabbagh, M. / Pihan, Antoine Paulin (tr.) 1853. *Aventures d'un négociant de Bagdad*. Paris: Impr. de Preve et Cie.
- Sabbagh, Michel / Silvestre de Sacy, A. I. (tr.) 1805. *La Colombe messagère plus rapide que l'éclair, plus prompt que la nue*. Paris: Imprimerie impériale.
- [كتاب مسابقة البرق والغمام في سعاة الحمام، ١٨٠٤.]
- Sabbagh, Michel / Silvestre de Sacy, A. I. (tr.) 1811. *Cantique à S. M. Napoléon, empereur des Français et de roi d'Italie à l'occasion de la naissance de son fils Napoléon II, roi de Rome*. Paris: Imprimerie impériale.
- [نشيد قصيدة تهنئي لسعادة القيصر المعظم نابوليون سلطان فرنسا في مولد بكره سعادة ملك رومية نابوليون الثاني]

- Sabbagh, M. / Thorbeche, H. (ed.) 1886. *Mihâ'il Šabbâg's Grammatik der arabischen Umgangssprache in Syrien und Aegypt.* Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.
[الرسالة الثامنة في كلام العامة والمنهاج في أحوال الكلام الدارج، ١٨١٢.]
- Schnurrer, Christianus Fridericus de (Schnurrer, Christian Friedrich von). 1811. *Bibliotheca arabica*. Halae ad Salam: I. C. Hendel.
- Silvestre de Sacy, A. I. 1806. *Chrestomathie arabe, ou, Extraits de divers écrivains arabes, tant en prose qu'en vers*. Paris: Imprimerie impériale.
- Trébutien, G. -S. 1828. *Contes inédits des Mille et une Nuits: Extraits de l'original arabe par M. J. de Hammer*. 3 vols. Paris, Librairie orientale de Dondey-Dupré Père et Fils.
- Vajda, Georges. 1940–1969. *Notices de manuscrits arabes rédigées par Georges Vajda. Notices des manuscrits Arabe 3630 à 4155*. Bibliothèque nationale de France. [BnF manuscrit, arabe 7302]
- Zaydān, Jurjī. 1992 [1911]. *Tārīkh 'ādāb al-luġha al-'arabīya*. Beirut:
- Zotenberg, M. Herman. 1888. *Histoire d' 'Alā al-Dīn, ou, La Lampe merveilleuse: Texte arabe publié avec une notice sur quelques manuscrits des Mille et Une Nuits*. Paris.

[『千夜一夜』アラビア語刊本および翻訳（年代順）]

- Shirwanee, Shuekh Uhmud Bin Moohummud Ool Yumunee (Shaykh 'Aḥmad ibn Muḥammad Shīrwānī al-Yamanī). 1814–1818. *The Arabian Nights Entertainments; In Original Arabic*. 2 vols. Calcutta, P. Pereira, The Hindoostanee Press. [カルカッタ第1版]
- Habicht, Maximilian and Heinrich Leberecht Fleischer. 1824–1843. *Tausend und eine Nacht, Arabische. Nach einer Handschrift aus Tunis*. 12 vols. Breslau. [ブレスラウ版]
- al-Sharqāwī, 'Abd al-Raḥmān al-Šafatī. 1835. *'Alf layla wa-layla*. 2 vols. Bulaq. [ブーラク版]
- Macnahten, William H. 1839–1842. *The Alif Layla or the Book of the Thousand Nights and One Nights, Commonly Known as "The Arabian Nights' Entertainment."* 4 vols. Calcutta, W. Thacker and Co.; St. Andrew's Library. [カルカッタ第2版]
- Mahdi, Muhsin. 1984. *The Thousand and One Nights (Alf Layla wa-Layla) from the Earliest Known Sources, Part 1*. Leiden, E. J. Brill. [ライデン版]
- Gallan, Antoine. 1704–1717. *Les mille et une nuits, contes arabes*. 12 vols. Paris.
- Burton, Richard F. 1885–1886. *A Plain and Literal Translation of the Arabian Nights' Entertainment, Now Entitled The Book of the Thousand Nights and a Night: With Introduction, Explanatory Notes on the Manners and Customs of Moslem Men and a Terminal Essay upon the History of the Nights*. 10 vols. Benares, Kamashastra Society.

[雑誌・事典類とその略号]

- AJMR: *The Asiatic Journal and Monthly Register for British and foreign India, China and Australasia*.
- BU: *Biographie universelle ancienne et moderne*. Paris: L. G. Michaud, Libraire-Éditeur.
- DNB: *The Dictionary of National Biography*. Oxford University Press.
- El¹: M. Th. Houtsma et al., eds., 1987. *E.J. Brill's first encyclopaedia of Islam, 1913–1936*, 8 vols. Leiden: E. J. Brill,
- El²: H. A. R. Gibb et al. eds., 1960–2009. *Encyclopædia of Islām*, new ed., 12 vols. Leiden: E. J. Brill,
- GAL 2nd.: Carl Brockelmann. 1943–49. *Geschichte der Arabischen Litteratur*, 2nd ed., 2 vols. Leiden: Brill,
- GAL suppl.: Carl Brockelmann. *Geschichte der Arabischen Litteratur, Supplementband*, 3 vols., Leiden: Brill, 1937–42.
- JA: *Journal asiatique*. Paris: La Librairie orientale de Dondey-Duprè Père E.

JASB: Journal of the Asiatic Society of Bengal.

JE: Isidore Singer et al., eds., 1901–06. *Jewish Encyclopedia*, new ed., 12 vols. New York and London: Funk & Wagnalls Company.

本研究は JSPS 科研費18K00518 『千夜一夜』をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相」の助成を受けて行われた。